岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 49

吉　岡　廃　寺

1982. 3

岡　山　県　教　育　委　員　会

文　化　課

序

岡山県が自然環境と気候・風土に恵まれ，古代から栄えていたことは，多くの遺跡が物語るところであります。

最近の県土開発事業の中でも，圃場整備事業は大規模なものの一つであり，件数もかなりの数にのぼっています。圃場整備のように多数の地権者が関係する開発事業については，文化財の保護保存の立場から特に慎重に対処しております。

吉岡廃寺の発掘調査は，こうした開発に先立ち保護保存の資料を得て調整を図ることを目的とし，国庫補助を得て県教育委員会が調査を実施したものであります。

調査の結果，吉岡廃寺は白鳳時代に創建され，平安時代にかかる時期まで存続していたことが明らかになりました。また，ほぼ一町四方の寺域をもち，法隆寺式に近い伽藍配置などであったことが想定できました。本報告書は，この調査の成果をまとめたものであります。今後の文化財の保護保存に活用され，また古代寺院址を研究する資料として役立てば幸いであります。

遺跡の保存については，圃場整備の事業主体である瀬戸町関係部局の御協力と御努力により，遺跡をほとんど破壊することなく工事を進め得る見通しが立ち，各位に敬意を表す次第であります。また，調査にあたっては専門委員をはじめ，瀬戸町教育委員会，瀬戸町文化財保護委員，地権者等関係各位から多くの御支援と御助言を賜わりました。さらに，地元有志の方々には，寒い中にもかかわらず誠心誠意発掘作業に従事していただきました。あわせて厚く感謝いたします。

昭和 57 年 3 月

岡山県教育委員会

教育長　佐藤章一

例　　言

1．これは，赤磐郡瀬戸町が計画している農村総合整備（圃場整備）事業に先立ち，岡山県教育委員会が昭和56年度国庫補助を受けて実施した，瀬戸町吉岡廃寺の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査期間は昭和56年11月16日～57年2月10日，その後報告書作成作業を実施した。

3．この報告書の作成は岡山県教育委員会が実施し，文化課職員柳瀬昭彦が担当した。

4．遺構・遺物の実測・浄写及び遺物整理は主に柳瀬が行い，文化課職員岡田博・岡本寛久・光永真一・山磨康平・中野雅美・島崎東の助力を得た。また，遺物の写真撮影には亀田菜穂子，拓本には清水恵子の援助があった。執筆・編集には柳瀬があたった。

5．この報告書の高度値は，第3図にあるB.M.を利用した。また，方位はすべて真北であり，遺構平面図の場合は，グリッドを示すNの後の数字の多い方が北を示す。

6．この報告書に掲載した第1図吉岡廃寺周辺遺跡分布図（1／50000）は，建設省国土地理院発行の25000分の1地形図「万富」「備前瀬戸」の一部を縮小・複製したものである。

7．この報告書の挿図・図版では，トレンチ→T，土壙→Pの略号を使用している。

8．第3章第2節遺物の項で使用した瓦類の部分名称，文様，製作技法等の用語については，奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰの解説を参考にした。

9．発掘調査で出土した遺物，及び実測図・写真類は，すべて岡山県教育委員会文化課分室に保管している。

本 文 目 次

序
例　言
目　次
第1章　地理・歴史的環境 …… 1
第2章　調査経過 …… 4
　第1節　寺院の現状と名称 …… 4
　第2節　調査に至る経過 …… 4
　第3節　調査の方法と調査経過 …… 5
第3章　調査の概要 …… 9
　第1節　遺　　構 …… 9
　第2節　遺　　物 …… 22
　第3節　寺院以外の遺構，遺物 …… 37
第4章　結　　語 …… 39
　・遺構・遺物からみた創建と廃絶 …… 39
　・伽藍配置と寺域 …… 40
　・今後の課題 …… 41

挿 図 目 次

第1図　吉岡廃寺周辺遺跡分布図（S＝1/50000） …… 1
第2図　吉岡廃寺周辺地形図（S＝1/20000） …… 2
第3図　地割り及びトレンチ設定図（S＝1/1500） …… 6
第4図　塔心礎　平・断面図（S＝1/30） …… 9
第5図　推定寺域内遺構配置図（S＝1/800） …… 10
第6図　塔跡　平・断面図（S＝1/120） …… 11
第7図　塔基壇版築　断面図（S＝1/30） …… 12
第8図　T－35　平・断面図（S＝1/100） …… 13
第9図　T－14，15，16，18，19　平・断面図（S＝1/100） …… 15
第10図　T－40　平・断面図（S＝1/100） …… 16
第11図　T－40　瓦溜り及び下部遺構　平・断面図（S＝1/50） …… 17
第12図　T－41～44　平・断面図（S＝1/100） …… 18
第13図　大溝（T－21，28）断面図（S＝1/100） …… 19

第14図　T－1，17，20　平・断面図（S＝1/100）…… 20
第15図　T－46，48　平・断面図（S＝1/100）…… 21
第16図　軒丸瓦　1～4類（S＝1/4）…… 23
第17図　軒丸瓦　5・6類（S＝1/4）…… 25
第18図　軒丸瓦　7類（S＝1/4）…… 26
第19図　軒平瓦　1・2類（S＝1/4）…… 27
第20図　軒平瓦　2・3類（S＝1/4）…… 29
第21図　平瓦各種叩き目（S＝1/3）…… 30
第22図　鴟尾（S＝1/4）…… 30
第23図　出土遺物（1）（S＝1/4）…… 33
第24図　出土遺物（2）（S＝1/4）…… 34
第25図　出土遺物（3）（S＝1/4）…… 35
第26図　出土遺物（4）（S＝1/2）…… 36
第27図　T－16，12 遺構　平面・断面図（S＝1/100）…… 37
第28図　出土遺物（5）（S＝1/4）…… 38
第29図　寺域及び伽藍配置想定図（S＝1/1200）…… 40

表　目　次

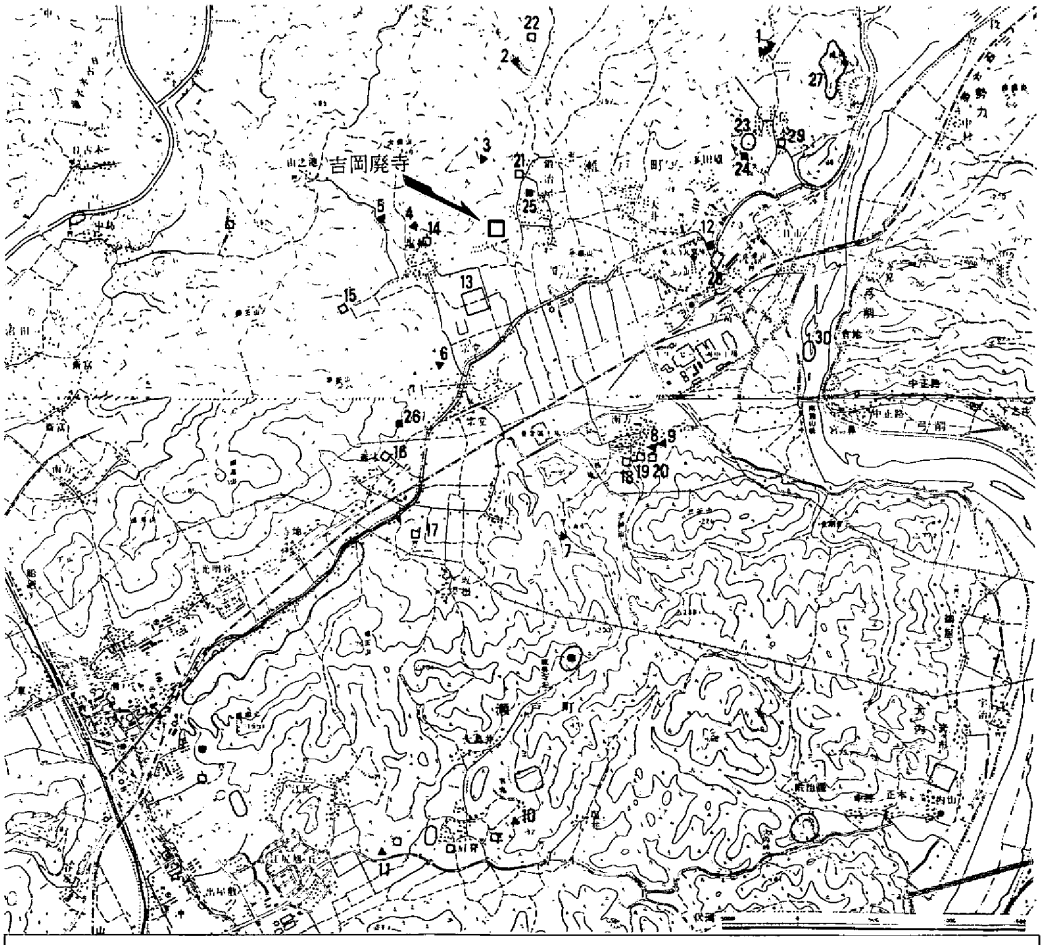
第1表　軒丸瓦計測表 …… 27
第2表　軒平瓦計測表 …… 31
第3表　軒瓦・鴟尾出土トレンチ及び類型別出土個体数一覧表 …… 32

図　版　目　次

図版1　吉岡廃寺遠景
図版2－1　塔心礎
2－2　塔心礎抜取り穴断面
図版3－1　塔東側（T－24）瓦溜り
3－2　塔東側（T－24）基壇版築
図版4－1　塔北側（T－22）瓦溜り
4－2　塔北西隅（T－27）基壇
図版5－1　T－14・18・19溝状遺構
5－2　T－19溝状遺構瓦出土状態
図版6－1　T－40瓦溜り検出作業
6－2　T－40瓦溜り
図版7－1　T－40瓦溜り
図版7－2　T－40瓦溜り下部検出遺構
図版8－1　築地溝（T－1）検出状態
8－2　大溝（T－28）検出状態
図版9－1　掘立柱柱穴（T－16）検出状態
9－2　掘立柱柱穴（T－12）検出状態
図版10　軒丸瓦（1，2類）
図版11　軒丸瓦（3，4，5a，5b類）
図版12　軒丸瓦（6，7類）・軒平瓦（1類）
図版13　軒平瓦（2類）
図版14　須恵器各種
図版15　台座・鴟尾・鉄製品
図版16　土器各種

第１章　地理・歴史的環境

吉岡廃寺は，赤磐郡瀬戸町大字塩納に存在する白鳳創建の寺院跡である。廃寺の東には，中国山地に源を発し，奥津，津山，柵原，和気，長船，邑久を経て蛇行しながら瀬戸内海に注ぐ吉井川が南流する。下流域に入って大きく屈曲する和気，長船のあたりでは川幅も約 300m と広い。熊山山鬼の西側を，迂回するように南下するこの吉井川と約 5.3km 西に南下する砂川と



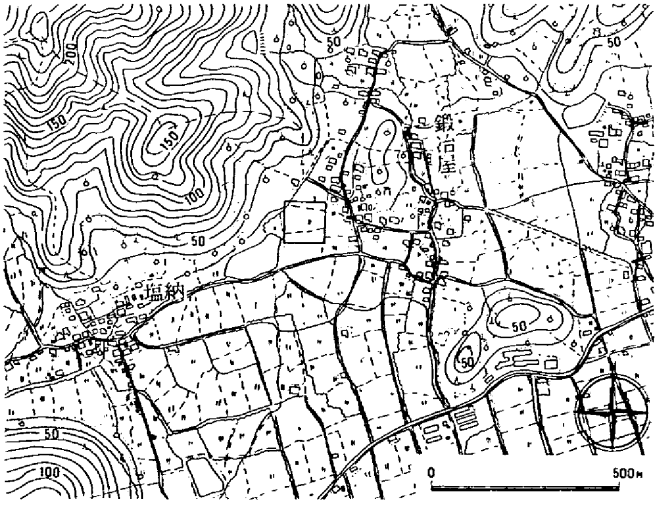
1. 松尾古窯跡群	7. 二の倉窯跡	13. 塩納大日遺跡	19. 五反田廃寺跡	25. 鍛冶屋上の山経塚
2. 辛音口窯跡	8. 寺山窯跡	14. 寺　　跡	20. 高徳山妙源寺跡	26. 火消経塚
3. 大谷窯跡	9. 寺山窯跡	15. 梅手折山法蓮廃寺跡	21. 王了寺館跡	27. 保木城跡
4. 窯　　跡	10. ゴッテン窯跡	16. 妙興廃寺跡	22. 天王山遺跡	28. 梅遺跡
5. 勘定口窯跡	11. 徳王寺窯跡	17. 夏井遺跡	23. 西ケ坪遺跡	29. 保木風呂屋遺跡
6. 窯　　跡	12. 万富東大寺瓦窯跡	18. 妙見下廃寺跡	24. 西ケ坪経塚	30. 東大寺瓦散布地

第１図　吉岡廃寺周辺遺跡分布図（S＝1／50000）

の間は，南北を標高200～300mの丘陵で画されて東西に長い小盆地を形成している。そのうち吉井川に近い東西約2kmの部分では，しだいに可耕地がひらけ，南北に約1.5kmと広くなっている。この小盆地を東西に横切るように，17世紀後半に池田藩の津田永忠の手にかかったといわれる田原用水が走る。この田原用水と山陽本線との間は周辺に比べて低く，古代には湿原であった可能性が強い。地理的には，古代の主要道，旧山陽道が北側の山を越えたところに位置するので，この小盆地から旧山陽道に至る南北の間道は4ルートが考えられる。ルートは，①鍛冶屋から尾坂峠を越えて熊山町に出る，②塩納から北側の谷を上がり，西にふって山陽町中島に出る，③塩納から西の峠を越えて山陽町南方に出る，④東の吉井川沿いに和気に出る，などが予測できる。

歴史的な環境をふりかえると，この地に古代寺院が建立される以前の遺跡は，現在のところあまり知られていない。小盆地を望む低丘陵には，弥生土器の散布が点々と確認される以外は弥生時代では墳墓や台状墓と思われる墓が2－3基周知されるにとどまる。また，古墳時代では，南側の丘陵の片山，南方に前半期古墳が集中して存在する一方，北側の丘陵には前半期古墳はほとんど確認されておらず，横穴石室をもつ後期古墳数基が散在するという状態で，小盆地の南辺と北辺とではみごとな対象性をみせる。いずれにせよ横穴石室墳の中で，規模的に特出するものは知られていない。

吉岡廃寺の存在する塩納・鍛冶屋のあたりは，明治時代の中頃から大正年間にわたってそれぞれ吉岡村，太田村（註1）であり，吉岡廃寺の名称は吉岡村の村名から付けられたと思われる。その後，昭和の初めに合併して万富村，1951年（昭和26）に万富町，1955年（昭和30）に瀬戸町となって現在に至っている。古代においては備前国上道郡に属し，『和名類聚抄』にみえる磯名郷が当地に比定できそうである。『続日本紀』天平神護2年（766）5月の条には「上道郡物理・肩背・沙石の三郷を割いて藤野郡に隷す」の記事があり，磯名郷を当地に比定し，沙石郷を磯名郷に当てる説もある。とすれば，それ以後769年（神護景雲3）に藤野郡が和気郡と改称され（註2），788年（延暦7）に吉井川以西を割いて磐



第2図　吉岡廃寺周辺地形図（S＝1／20000）

梨郡となる（註３）まで，奈良時代の終り頃の22年間に３度の改称ならびに行政界の変化・変遷を経たことになる。この頃，塩納の吉岡廃寺が小盆地を囲むように，ほぼ同時に存在していたことは瓦の出土（註４）からまず間違いないものと思われ，森末から西を他の郷，例えば物理郷に当てるとしても，古代寺院跡が狭い地域に３カ寺も存在するという特異な状況を示している。

第１図は奈良時代以降の遺跡を取り上げたが，この地域はそれ以前に比べて，奈良～中世の遺跡の多さが目につく，万富には国指定史跡の東大寺瓦窯跡が知られ，1980年には岡山県教育委員会により磁気探査と発掘調査が実施され，計13基のロストル式平窯の存在が確認されている（註５）。また，吉井川河床の東大寺瓦の散布は，瓦搬出における水運利用を証明している。そのほか窯跡としては，平安時代末から鎌倉時代にかけての窖窯が比較的多く知られている。平安時代には鍛冶屋周辺だけでも３基の経塚が周知され，平安時代以降に建立，存続したと思われる寺院は，小盆地周辺だけでも数カ所にのぼる。そして，小盆地を含む一帯は，中世には庄園（吉岡庄）であったことが知られている。地形的にみれば，吉岡廃寺の想定される南向きの緩斜面や，大日遺跡の存在する比較的安定した低丘陵の張出し部分には，磐梨郡衙や庄家の存在などを予想する考え方もある。

ともあれ，奈良時代についていえば，律令国家社会の一地方が行政界の多大な変化，変遷を受け，なおかつこの地域が和気清麻呂の本貫地あるいは本拠地に近接しているだけに，歴史上きわめて興味深い。

なお，この頃について，葛原克人氏の助言に負うところが大きい。深謝。

註１　千種尋常高等小学校『太田・吉岡村誌』1924年

註２　『続日本紀』神護景雲３年６月の条には「備前国藤野郡を改め和気郡と為す」とある。

註３　『続日本紀』延暦７年６月の条には，「のぞみこうらくは河東旧に依りて和気郡となし，河西に磐梨郡を建てよ，中略，これを許す」とある。

註４　角田茂，土井秋夫『馬塚「古墳」調査報告』瀬戸町教育委員会1974年の中の第６図に紹介されている。

註５　岡本寛久「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37』岡山県教育委員会　1980年

参考文献

池邊　彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』1981年

山陽新聞社刊『岡山県 大百科辞典』上・下　1980年

第2章　調査経過

第1節　寺院の現状と名称

吉岡廃寺は，赤磐郡瀬戸町塩納に存在する。推定寺域内には，森井先，大久保などの小字がみられるが，地名では特に寺院関係の名残りをとどめていない。現在の行政区画では，推定寺域は塩納（旧吉岡村）の集落から500m以上も離れ，鍛冶屋（旧太田村）の集落の西側に隣接している。地形的には北西に山を背負い，南に小平野を望む山裾の緩斜面を占地している。現在では山瀬近くは柿畑・桃畑に開墾を受け，その南裾部に段状の水田が展開する。その水田の畦畔には，石組みの一部として使用された，ひとかかえもある大きな石の存在が以前から知られていた。その石は郷土史家荒木誠一によって注目され，『太田吉岡村誌』の中で「奇なる石」として説明が加えられている。その後，『改修赤磐郡誌』（註1）で「吉岡廃寺」と呼称されて古代寺院の存在が示されて以降，地元や研究者の間でもその名で周知されてきている。

吉岡の名称は旧吉岡村からとられたことは容易に察せられる。古代寺院の表記法，呼称法からいえば，文献で名称が判明している以外については，原則として地名（字名）を使用するのがより妥当かと思われる。しかし，『赤磐郡誌』の記載以来の，例えば大字名の塩納（しおのう）をとって塩納廃寺として報告された文献も知らない。従って，名称についての混同を避けるため従来からの呼称である「吉岡廃寺」として報告したい。

註1　岡山県赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』　1940年

第2節　調査に至る経過

岡山県下では，年々開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査がふえつつあるが，中でも農業の近代化・合理化を図る施策である圃場整備事業については，文化財保護行政側としては対策に苦慮しているのが現状である。市町村事業に伴う場合においては，市町村教育委員会の察知──→県教育委員会との協議──→確認調査──→保存協議──→現状保存，あるいは設計変更して保存，変更できない部分については記録調査という一連の措置を行ってきている。

吉岡廃寺の場合は，昭和54年3月に瀬戸町建設課が農村総合整備モデル事業（圃場整備事業）として想定される寺域一帯を含む約3万m^2について計画を示し，教育委員会を通じて文化課に協議があった。町としては，当地区一帯は農道が狭く，農業機械の運搬にも支障をきたすなど

のことから，地元の早期事業着工が望まれていることを例に上げて昭和55年度通年施行の予定を示した。文化課は，①周知の遺跡である「吉岡廃寺」が存在すること，②寺の保存状況や寺域及び伽藍配置が明らかでないことから確認調査の必要性があること，また，③確認調査の時期については予算及び人員の点で昭和55年度には実施できないとの見解を出した。

その後，数回の協議を重ね，①工事は昭和57年度に施行する，②確認調査の結果をもって再協議をおこなうこととし，県教育委員会は昭和56年度国庫補助を受けて昭和56年11月16日から延べ55日間にわたって発掘調査を実施したものである。

調査は専門委員の指導助言を得て実施した。なお調査にあたっては瀬戸町建設課，町教育委員会をはじめ，町文化財保護委員，鍛冶屋区長，地権者等関係各位に援助をいただき，また，地元有志の方々には作業員として協力を得た。記して感謝の意を表します。

調査体制

専門委員

岡山理科大学教授　鎌木義昌　　岡山大学教授　近藤義郎

岡山女子看護専門学校教頭　水内昌康

岡山県教育庁文化課

課長　早田憲治　　課長代理　吉光一修　　埋蔵文化財係長　河本　清

主任　田中建治　　文化財保護主査　柳瀬昭彦（調査担当）

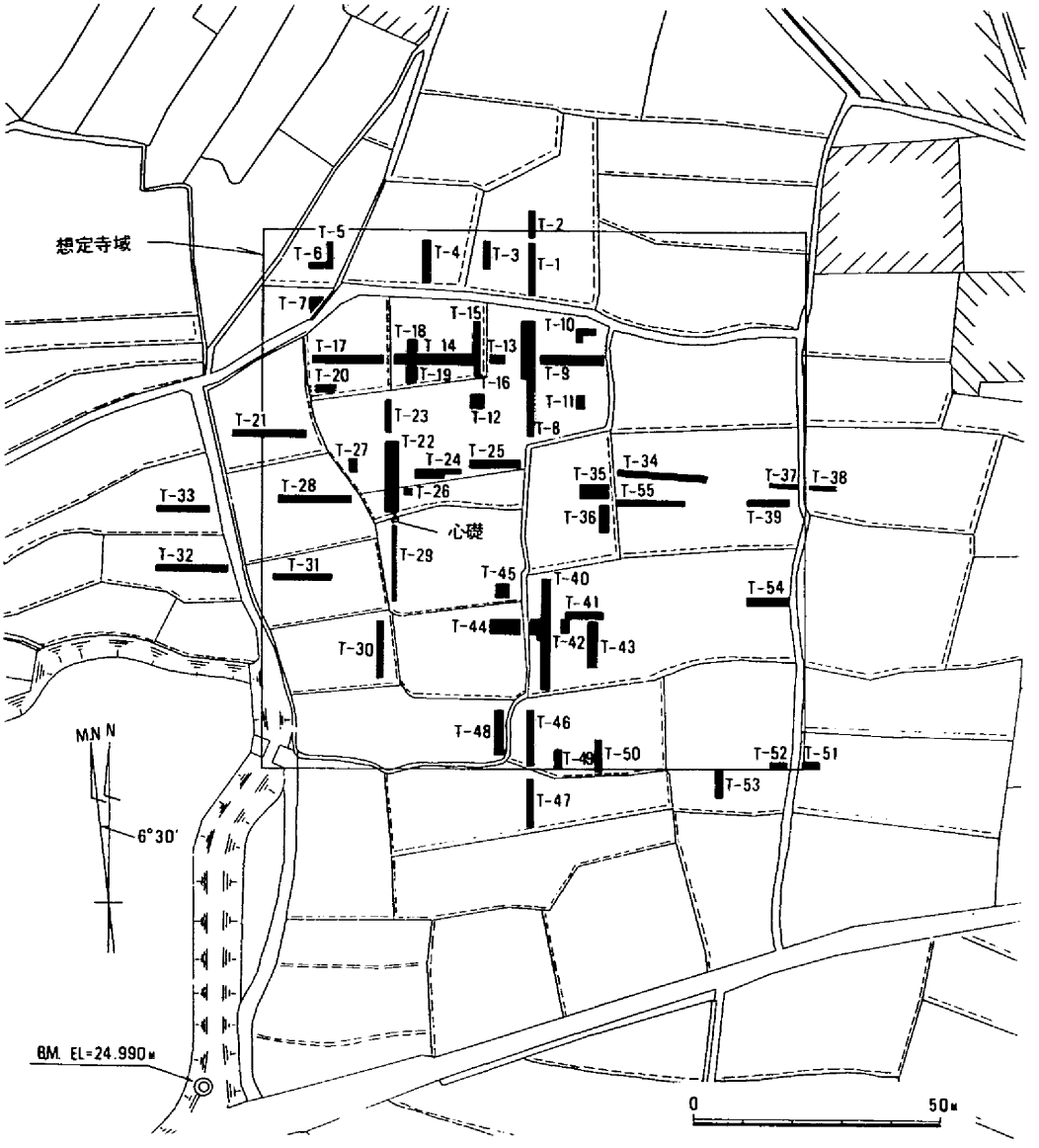
調査作業員

荒内要・大島定重・国定修・水田保平・山本猪智之・岡本正・弓本明・国定克己・国定啓人・荒内富貴子・国定富子・国定重子・国定一二子・山本和子・吉岡キミ子・岡本和子・岡本須恵子・国定美代子・国定安子・岸本敏子・国定登志子・国定利江・岡本光子

第３節　調査の方法と調査経過

吉岡廃寺は，礎石が田の畦畔に残っていること，周辺から布目瓦片が出土すること，礎石の南西にある森井池の中にかつて瓦窯が存在していたことなどが断片的に知られていたに過ぎない。「岡山県遺跡地図」（註２）では２町四方，奈良時代としている。

周辺の田の地割りを観察すると，礎石から東に約25mとそれから約50mの地点で畦畔が南北方向に延びており，両畦畔間が約半町を測るところから，まず東側の畦畔を寺域の東限と想定した。また，礎石から南に約50mの地点の，いくらか蛇行しながらも東西方向に延びる畦畔を南限と想定した。そして，中央にあたる南北方向の畦畔と南限の東西方向の畦畔の交点を起点（原点）とし，真北（MN－6°30′－E）に中軸線を設定し，グリッド割りを行った。原点を０と



第3図　地割り及びトレンチ設定図（S＝1／15000）

し，北はN，東はE，西はWとそれぞれ数字で示した。例えば，礎石の位置はN 50・W 27.5となる。

調査の手がかりは，その大きさからあまり移動されていないと思われた礎石（径約130cm）と，真北方向の二本の畦畔のみという現状であるので，礎石の北側部分と中軸線に沿った部分から掘り始めることにした。トレンチは基本的にはグリッド線に平行，または直交する方向に幅3mで，遺構の状況によっては部分的に幅1.5～2mでおもに想定寺域内に設定し，掘り下げていった。（トレンチの番号は当初，設定掘り下げの順につけていたが，対象地域が広範囲に

およんだため，基本的には北から番号の付け変えを行った。)

まず，中軸線に沿ったT－40において瓦溜りと溝状遺構を検出し，礎石の北側部分のT－22では瓦溜りと礎石の抜取穴（掘方）を検出した。礎石の掘方が普通の建物として大きく深いこと，掘方中央部から瓦溜りまでは約7.5m を測り，東側に設定したT－24の瓦溜りまでも掘方中央から真北に伸ばしたラインに直交して同様の距離を測ることなどを総合し，建物は一辺15mを測る塔であり，畦畔に残っている礎石は塔心礎であると断定した。また，トレンチにほぼ直交して端部が認められたため，寺の主要伽藍も真北を基準にしたグリッドに沿って存在するとの確証を得た。塔は推定寺域の中央部西に位置することになり，中軸線中央部南寄りに検出した瓦溜り及び溝状遺構は，位置的に中門の可能性があり，その二つの建物配置により主要伽藍は法隆寺式が想定でき，以後の調査はその想定のもとにすすめた。推定金堂の地点ではT－35で浅い瓦溜り，推定講堂の地点ではT－9で東へ落ち込む肩部を検出したが，版築層や礎石などは皆無であった。ただ，位置的にはT－14・15・18・19で検出した溝については，講堂の可能性もある。寺域追究のためのトレンチは20本近く設定したが，T－1，T－17，T－20で併行する二本の溝を検出した他は，良好とは言えなかった。ただ，T－21，T－28，などで幅約5m，深さ約1.2m の大溝（谷）を確認している。いずれも底近くまで瓦，須恵器，土師器などが出土しているため，寺の存続期間内には，存在していたとみられる。

全体では計約55本のトレンチを設定し，T－32，33を除くすべてのトレンチから瓦の出土をみた。しかし，遺構的には，田の削平などから塔や講堂の一部を除いて保存が悪く，全体の伽藍配置は想定の域を出なかった。

調査は昭和56年11月16日から開始し，昭和57年2月10日に終了した。

日誌抄

昭和56年

11月16日(月)　器材搬入。T－34，37，38 設定掘り下げ。遠景写真撮影。

17日(火)　グリッド設定。杭打ち。T－34，46掘り下げ。

18日(水)　T－34，46 掘り下げ。

19日(木)　T－46，40 掘り下げ。

20日(金)　T－40瓦溜り検出。写真撮影。T－46石組みと溝を清掃。写真撮影。

21日(土)　T－22設定，掘り下げ。（～22，24，25，30日）

25日(水)　T－8設定，掘り下げ。T－22礎石掘方検出。

30日(月)　T－24，26 掘り下げ。T－24瓦溜り検出。塔跡であることを確認。T－22写真撮影。

12月1日(火)　T－22，24 掘り下げ。T－24軒平瓦片出土。

2日(水)　T－35，36，44，41，1 設定，一部掘り下げ。

3日(木)　前日設定トレンチ掘り下げ。T－2，3掘り下げ。T－1で築地に伴うと思われる溝2本検出。清掃写真撮影。

4日(金)　T－3，T－9掘り下げ。

5日(土)　T－27，21 掘り下げ。

7日(月)　T－27で塔基壇の北西隅を検出。版築層を確認。T－9，21，23 掘り下げ。

8日(火)　T－10，21掘り下げ。T－21から金環出土。T－9東西溝南北溝掘

り下げ，清掃，断面撮影。

9日(水)　T－10，11，21掘り下げ。

10日(木)　グリッド杭打ち補足。T－45，12，13，10，21掘り下げ。

11日(金)　T－13，45終了。遺構なし。T－21，42掘り下げ。T－12に柱穴検出。

14日(月)　T－42瓦溜りと土壙を検出。T－21大溝の底近くで土器溜り検出。T－14掘り下げ。

15日(火)　T－14，4，51，52掘り下げ。T－14で東西溝と柱穴を検出。

16日(水)　T－4で薄い瓦溜り。T－14，52掘り下げ。

17日(木)　T－15，16，28，43掘り下げ。

18日(金)　T－14，15で溝，T－16で柱穴を検出。溝を追究するためT－18，19を設定。

21日(月)　T－17，18，19，28掘り下げ。T－17の西端部に2本の南北溝検出。南側にT－20を設定。T－28の西端部にT－21の大溝の続きと思われる溝検出。軒丸瓦出土。

22日(火)　T－17，19，20，28掘り下げ。T－25設定，掘り下げ。

23日(水)　T－18で溝のコーナー検出。19の溝内で軒平・塼が出土。T－5，6，25を掘り下げ。

24日(木)　T－5，6，25を掘り下げ。T－16で軒平瓦，25で瓦溜りを検出。25から軒丸，隅切軒平瓦，鴟尾が出土。

25日(金)　T－6掘り下げ。T－25瓦溜り清掃，写真撮影。器材点検。

昭和57年

1月6日(水)　T－32，33，7，31掘り下げ。

7日(水)　T－32，33，29，30，31掘り下げ。T－22塔心礎部分補助掘り下げ。T－29及び心礎断面実測。

8日(金)　T－46補足掘り下げ。T－24清掃，写真撮影。

9日(土)　T－53，49，47，50掘り下げ。T－40瓦溜り清掃（一部拡張）写真撮影。

11日(月)　T－49，50，48掘り下げ。T－40瓦溜り割り付け，実測。

12日(火)　T－46，47，49断面実測。T－40平面実測。T－39，48掘り下げ。

13日(水)　T－39，48掘り下げ，清掃，写真。T－40平・断面実測後，遺物取り上げ。T－30断面実測。

14日(木)　T－46，47写真撮影後，断面実測。T－32，33断面実測。T－31断面実測。町文化財保護委員見学。

18日(月)　T－54，55掘り下げ。T－24瓦溜り清掃，写真撮影。

19日(火)　T－49，50補足掘り下げ。T－46，48柱穴掘り下げ。T－8断面実測。文化庁桑原調査官現地指導。

20日(水)　T－52，53平・断面図実測。T－46の柱穴から柱根。T－51，52，53から埋め戻し開始（～2月9日まで）

21日(木)　T－50平・断面図実測。T－24遺物取り上げ後，補足のため掘り下げ。

22日(金)　T－44平・断面図実測，写真。T－24掘り下げ。地元民中心に現地見学会。150名くらい参加。

23日(土)　T－46，48平面実測。

25日(月)　T－30，31平面実測。T－21断面実測。

26日(火)　T－22補足掘り下げ。T－1，2断面実測。

27日(水)　T－28，3，4，5，48断面実測。

28日(木)　T－1，6，28平面実測，写真撮影。

29日(金)　T－14，15，16平・断面実測。T－18，19平面実測。

2月1日(月)　T－9，18，19，20断面実測。T－20平面実測。

2日(火)　T－9，10平面実測。T－24，25断面実測

3日(水)　T－27，34平・断面実測。

5日(金)　T－37，38，39平・断面図。T－22，35，36断面図。

6日(土)　T－41，42，43平・断面図。T－35平面図。

8日(月)　T－24平面図。実測終了。遺物，器材搬出。

9日(火)　埋め戻し終了。原点移動（見かえり杭打ち）。遠景写真撮影。

10日(水)　プレハブ撤去，器材搬出。発掘調査終了。

註2　岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図・第5分冊』　1978年

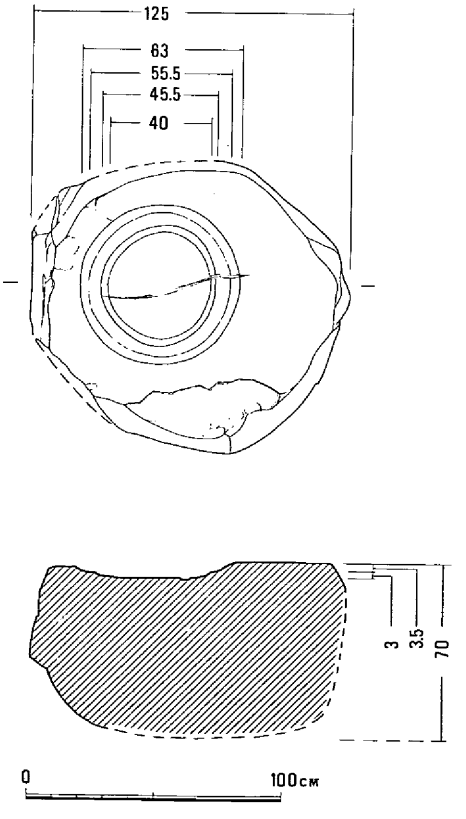
第3章　調査の概要

第1節　遺　　構

塔　　跡

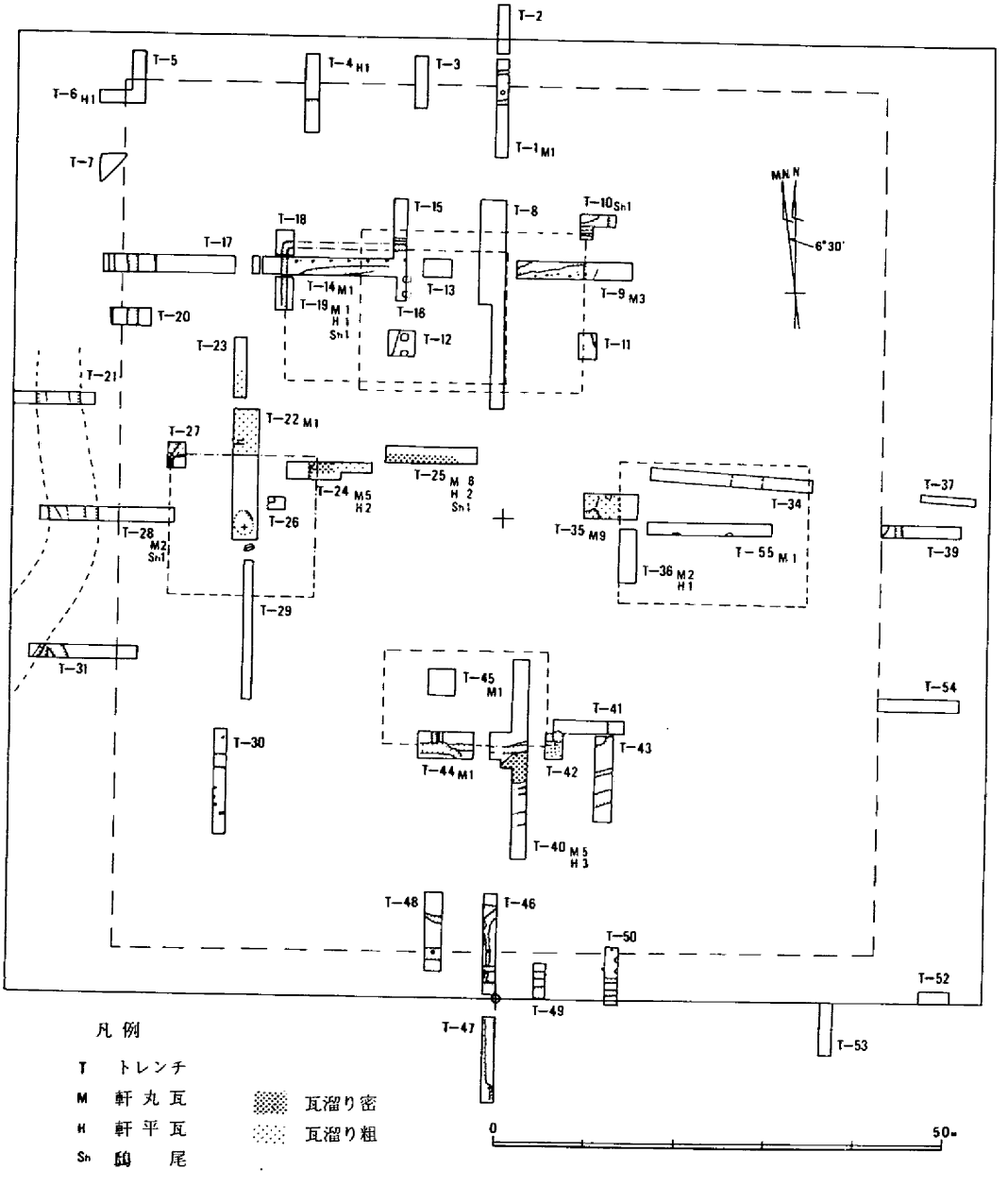
塔心礎は畦畔土手の一部として，二次的，人為的な移動を受け，柱座の面を外に向けてすえられている。当初は，これが心礎としてはやや小ぶりなため，金堂の礎石との考えも捨てきれなかった。土手に埋まっているままの実測であるため，外形の規模はひと回り大きくなるかもしれない。径約130cmの不整円形を呈し，厚さ70～80cmとみられる。柱座は一方に片寄り，円形に二段に抉られている。第4図の左側は，現在すえられている上に当たるが，その部分は土手の高さに揃えるためか一部わられた形跡がある。柱座の中央付近にみられる浅い亀裂は，石目の部分の風化によるものと思われる。石材は花崗岩である。当寺の約1km西方から北西にかけて産出するという。

さて，調査では心礎の上部分の畑，及び田に設定したT－22において，心礎抜取りと掘方を検出し，掘方の推定中央部から北へ約8mのところからトレンチの北端まで瓦溜りを検出した。N56・W30～N66・W30の部分について，基壇と瓦溜りの一部を地山まで掘り下げた結果，基壇部には2層の（第6図T－22，13・14層）の版築を認めた。一方，心礎抜取り穴及び掘方部分については，部分的に掘り下げただけなので，平面的には捉えていない。しかし，T－27及びT－24で確認した基壇裾部から割り出した塔心礎の位置（破線で示した心礎）からすれば，位置的には問題がない。土層観察の結果，T－22断面の4・



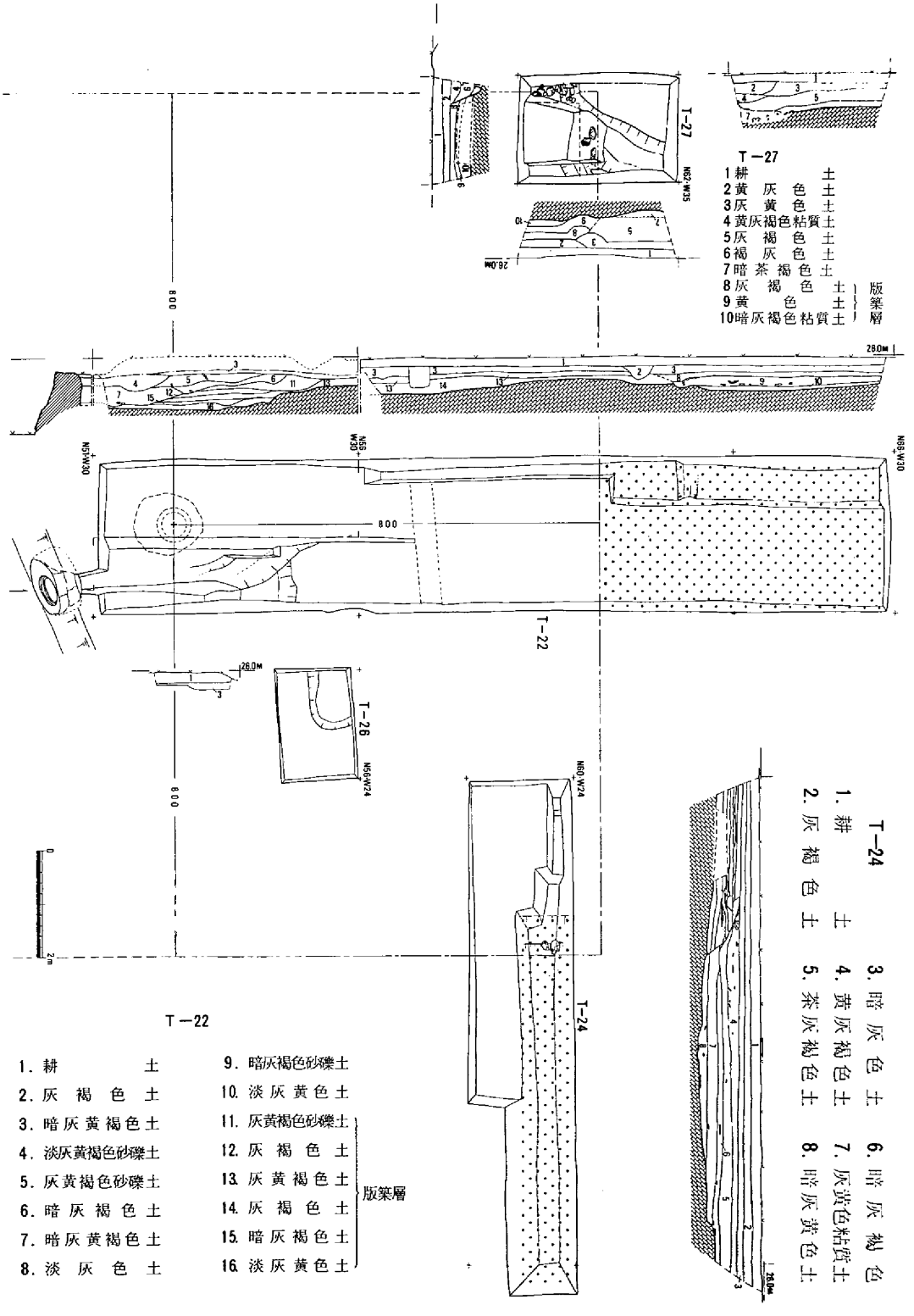
第4図　塔心礎 平・断面図（S＝1／30）

5・6・7層は抜取り内堆積土層であり，11・12・13・15・16層は心礎掘方内版築層であることが判明した。また，13層が基壇の版築層と心礎掘方のそれとが同一の可能性があり，地山部分が露出するところまで掘込み地業を行ったのち，まず心礎の位置を掘り，底から約35cmまで

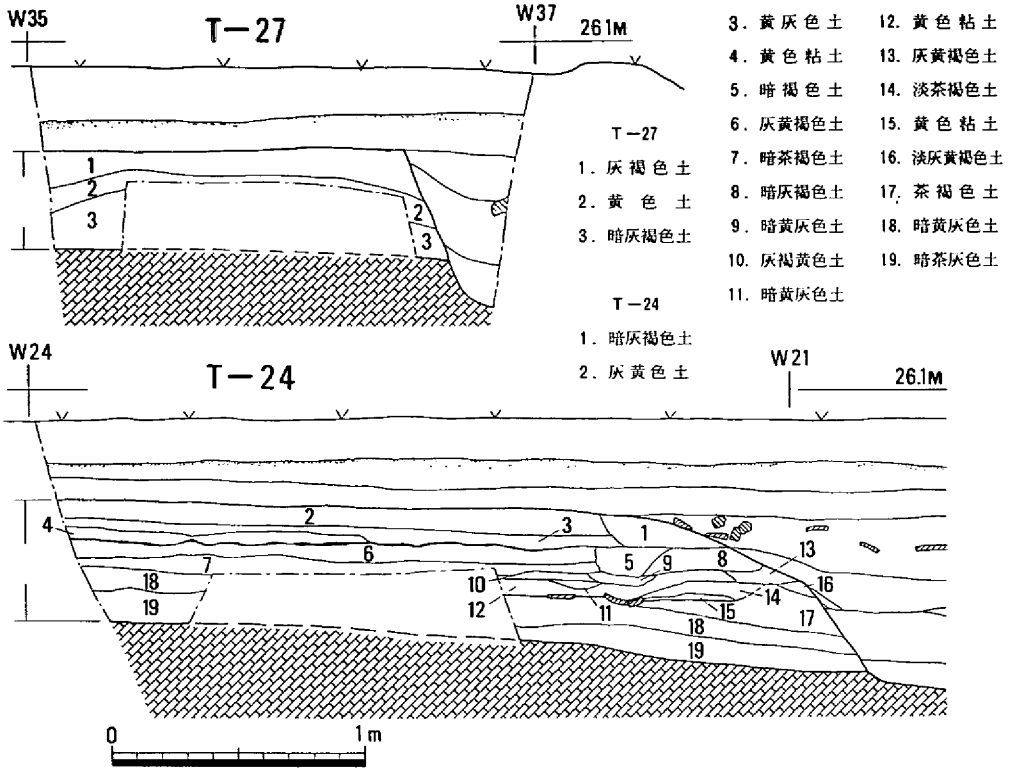


(M・H・Shの後の数字は出土個体数を示す。ただし，Shは出土点数。)

第5図　推定寺域内遺構配置図（S＝1／800）



第6図　塔跡　平・断面図（S＝1／120）



第７図　塔基壇版築断面図（Ｓ＝1／30）

版築し（その時点では基壇部分もある程度版築が進んで来ていることになる），心礎をすえたのち，基壇全域にわたって同時に版築が行われたと理解される。一方，Ｔ－24と27では根石と思われる角礫が検出されている。両トレンチの根石上部は 25.2 ～ 25.4 mとほぼ同一レベルを測り，基壇裾部を取りまく一連のものと考えられる。ただ，石の大きさが握り拳大から人頭大まで不規則であり，乱石積基壇のように積み上げた形跡はなく，基壇化粧の根石と考えた方がよかろう。また，両トレンチ断面でも版築層が顕著に確認でき，特にＴ－24では約50cmの間に20層近くの分層が可能であった（第７図）。なお，Ｔ－22の14層やＴ－27の10層中から数片の平瓦を採集していたが，Ｔ－24では版築17・18層の上面に敷き並べた状態（図版３－２）で検出でき，このことは基壇をも含む再建が行われたことを示すものとして注目される。また，瓦を境にして上層部に細かい層の版築がおこなわれ，下層の17～19層と区別されることから，再建時には瓦面から上部に手が加えられた可能性を指摘できる。

一方，版築層が部分的に残りが良い割には心礎以外の礎石及び礎石掘方はほとんど確認できず，ただＴ－26でわずかに礎石掘方状凹部が検出されたにすぎない。これは，当初四天

柱の掘方と考えられていたが，位置的には側柱の可能性が強い。

地形的には，各トレンチで確認された地山のレベルが均一でなく，T－22の中央部を中心として東・西・南方向に徐々に下がることから，北から舌状に延びた自然地形の張出し部分を利用したものであろう。

現状では，基壇の南及び南西部に約⅓程の削平を受けてはいるが，全般的には保存が良いことがわかった。加えて，想定においても，真北を基準として設定したグリッドと合致することから，伽藍全体についても真北を基準とした地業が考えられる。

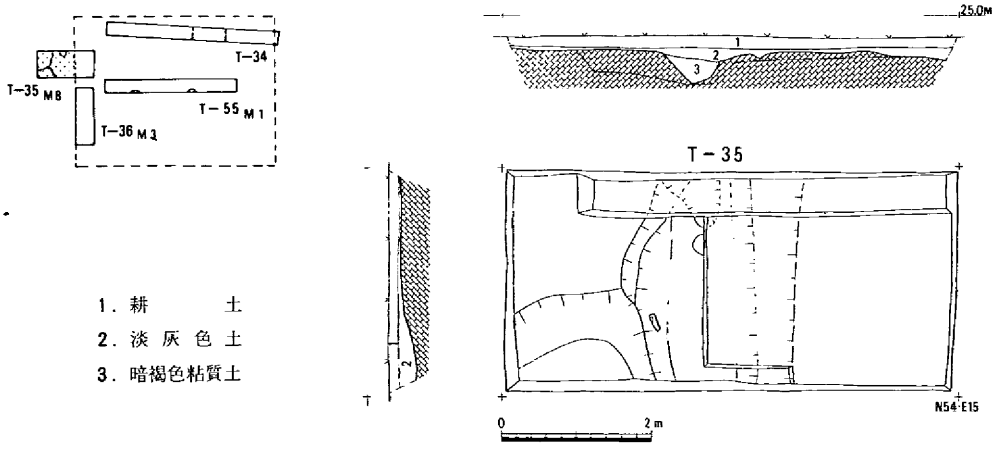
なお，T－22瓦溜りから軒丸瓦1点，T－24瓦溜りから軒丸瓦5点，軒平瓦2点が出土している。

金堂跡推定地

金堂は想定寺域内の塔跡の位置から推定した。この部分の田は，塔が存在する田面よりも約1.2m も下がり，地形的にはかなりの削平が考えられる場所でもある。

T－35のE13ラインから西にかけて瓦溜りを検出した。これは第8図土層断面の2層に包括形成されたもので，幅約2 2m を測り，南北方向に延びる浅い溝に堆積した状況を示す。そして，T－36の西壁寄りに，T－35から続くと思われる浅い瓦溜りを検出している。なお，両トレンチから合わせて11点にのぼる軒丸瓦が出土し，T－35の溝からは須恵質の台座風土製品（第24図1）や鉄滓なども出土している。

一方，T－34，55の地山レベルから南東側に徐々に下がる地形が看取され，加えて包含層中



第8図　T－35　平・断面図（S＝1／100）

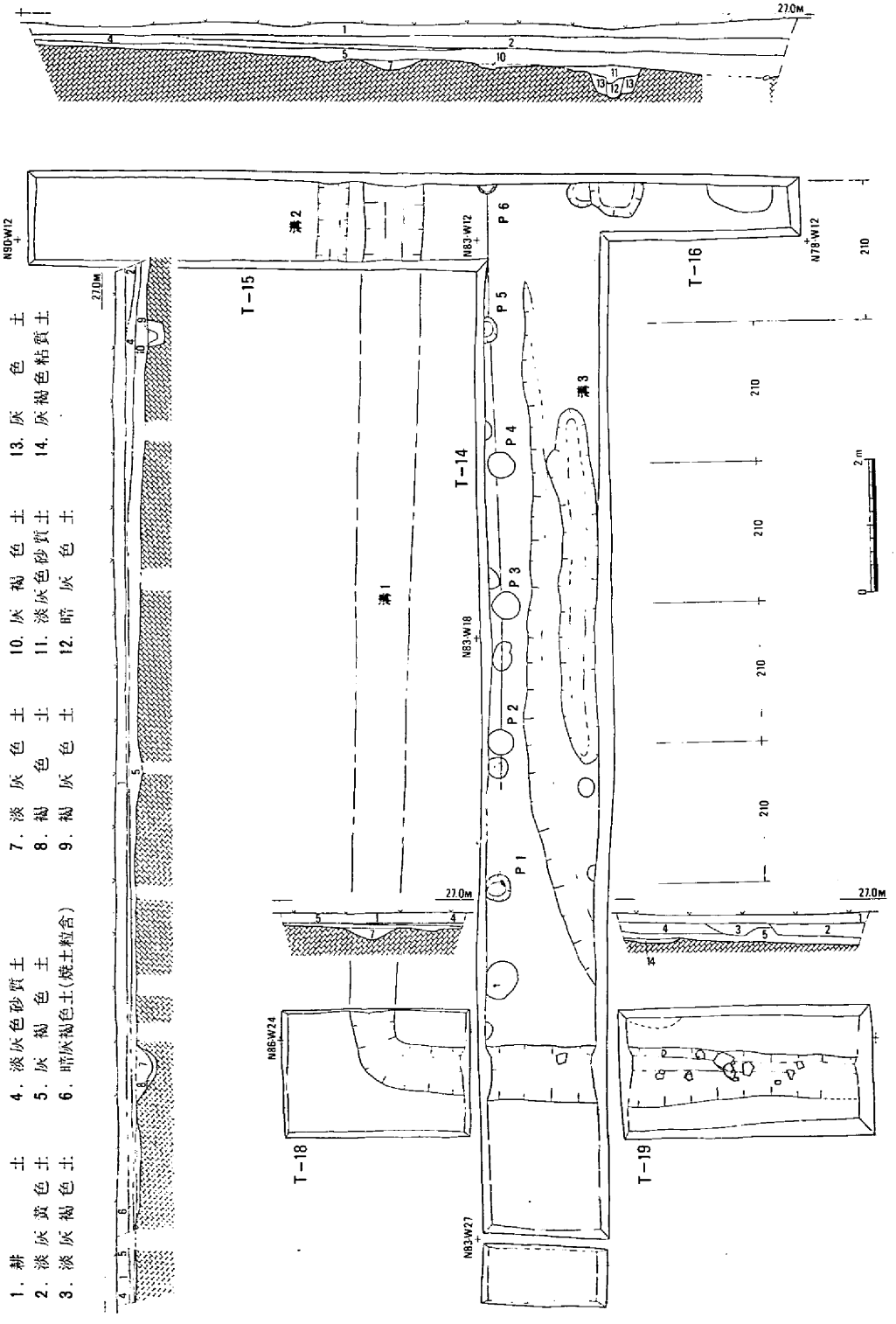
に瓦片がみられるものの中世遺物と混在することから，この付近は後世の削平が大であったと思われる。

以上のことから，特にこの付近に金堂が存在した確証は見い出せないが，T－35～36にかけての瓦溜りの肩部が南北方向であることから，金堂の西端を示す可能性を残している。しかしながら，塔跡の東側に設定したT－25で検出した瓦溜りから鴟尾片が出土している事実から，金堂の位置は全体的に塔に寄って比定される可能性も強い。

講堂推定地

講堂についても，金堂と同様に想定寺域と塔の位置から推定して，T－8～18，19を設定した（第5図）。T－14～18，19を設定した田面と，T－9～13を設定したそれとは約80cmの比高差がある。T－8の中央から北寄りについては，耕土を剝げばすぐに地山であった。遺構らしきものは検出されていない。中央部から南は，南端で床土下約60cmまでが瓦等の包含層となっており，地山は南へ緩い傾斜で下る。T－8に直交して設定したT－9では，E8.5のラインで東へ落ち込む肩部を検出した。落ち込み層中からは，瓦留りというほどではないが，軒丸瓦3点を含み多くの瓦が出土している。また，このトレンチは須恵器片が他に比して多い。T－15，18，14，19にかけては溝が検出された。この溝1はT－18で直角に屈曲し，東と南に延びる幅約1m，深さ約20～30cmの溝である。溝1の断面観察によると，T－15，18ではあまり顕著でないが，T－14，19では内側の溝の立ち上がりが外側のそれに比べて極端に急である。また，T－19では7層の底のレベルで石や瓦が一固まりになって出土し，その中に軒平瓦1点と塼1点が混る。遺物の出土レベルから，これらの遺物は溝の内側に存在したと推定される建物の廃絶後，早い時期に埋ったものと考えられる。なお溝底のレベルから考えて，約80cmの比高差のある東及び南側の田では完全に削平されている。さらに，各トレンチを通して4・5層は，溝1が埋って少なくとも一度以上の削平を受けた後の堆積土であり，この建物が版築をもっていたかどうか現状では判断しがたい。

このほか，T－14の北壁裾に沿って東西方向に並ぶ6個の柱穴を検出した。これは，東西方向の溝1の約1.2m南側にほぼ併行して存在する。柱穴の中心は必ずしも正確に一直線に並ばないが，各柱穴中心間は210cmの等間隔である。いずれも径は40cm前後を測る。そのうちP1，5，6について掘り下げ，P1は深さ約20cmで，柱のつめ石の代わりと思われる立った状態の瓦片（格子叩き目）と，礎板の代わりと思われる底に敷かれた瓦片が出土している。また，P5は深さ約25cm，P6は約5cmを測り，3つの柱穴の底のレベルは26.3・25.95・26.17mとそれぞれ違っている。柱穴に瓦を使用していることから少なくとも寺院創建以降の遺物であり，



第9図　T−14, 15, 16, 18, 19　平・断面図（S＝1／100）

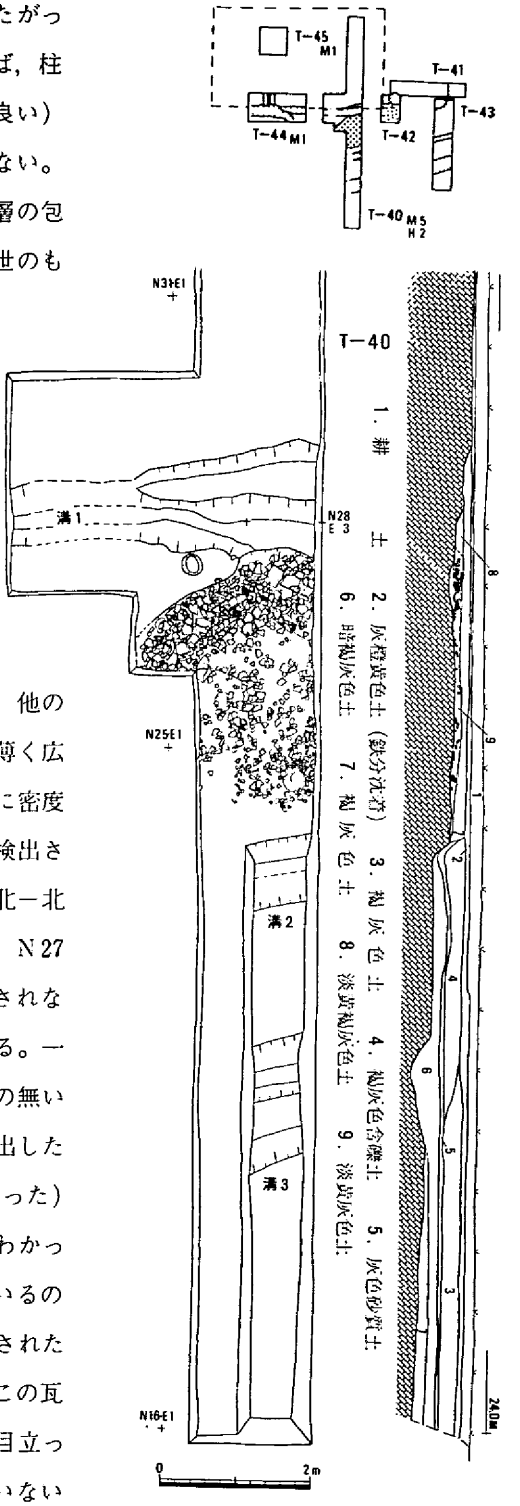
位置関係から溝1と関連すると思われる。したがって，溝1が寺院に関係するという前提に立てば，柱穴列は周囲に溝を持つ建物（講堂と考えても良い）の再建時における足場穴の可能性も否定できない。

なお，溝2，3については，土層的には5層の包含層に含まれるので，溝1や柱穴列よりは降世のもであろう。またT－16の2つの掘立柱掘方については，第3節でふれたい。

中門推定地

想定中軸線の南寄りのT－40瓦溜り，及びT－44にかけて検出した溝1により，付近に建物の存在を推定した。

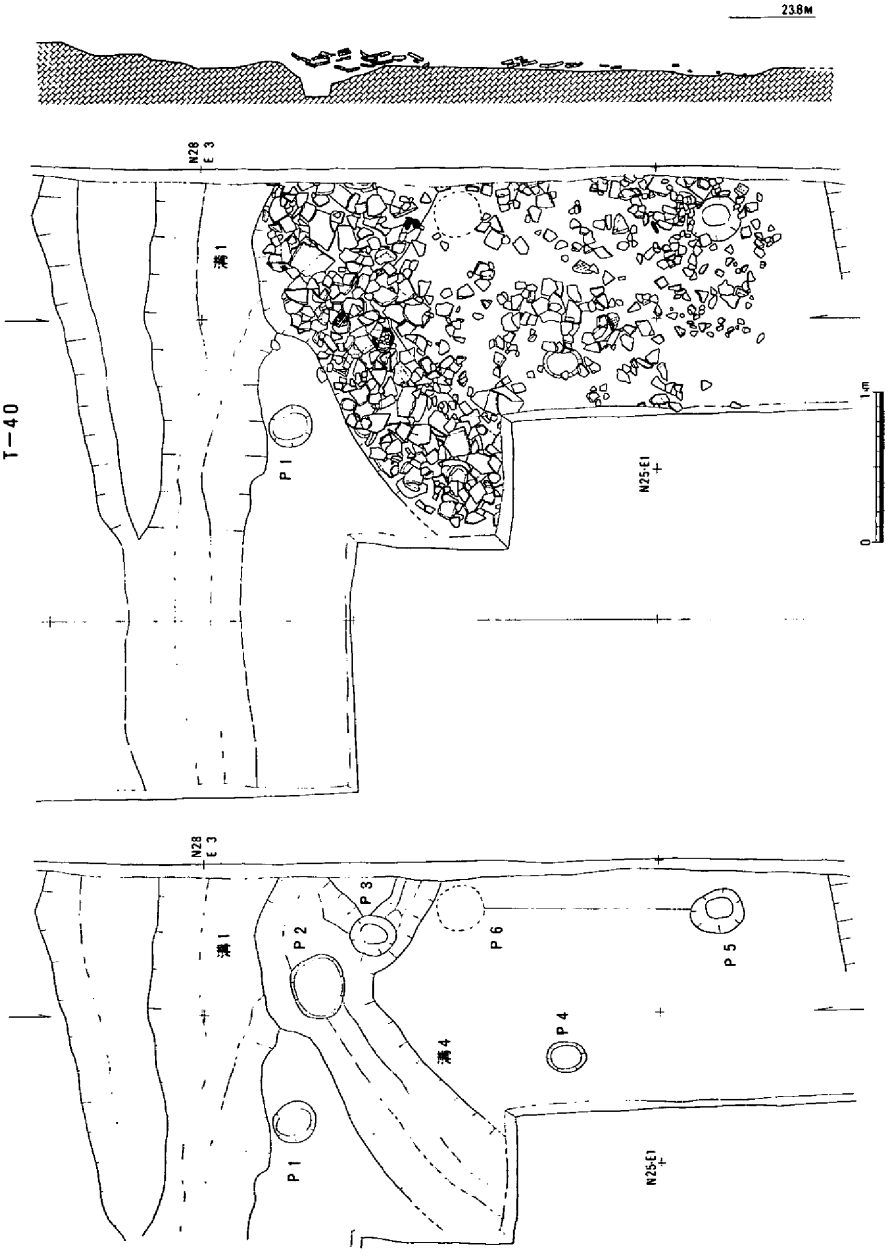
瓦溜りは，幾重にも重なり合って検出され，他の地点のそれに比べて密度が高い。T－12まで薄く広がっているが，T－44には延びていない。特に密度の高いT－14の瓦溜り北側部分下には溝4が検出された。この溝は設定グリッドには沿わず，南北－北東方向にわずかに孤状を呈している。そして，N27 E 3付近では溝がすぼまり，T－42では検出されない。寺院に直接関係するかどうかは不明である。一方，瓦溜り検出時に確認していた2ケ所の瓦の無い円形の部分は，瓦取りはずし後，地山面で検出した柱穴状土壙P 5（P 6は地山まで達していなかった）と符合し，瓦溜り形成後の柱穴であることがわかった。それに加え，P 5からは白磁が出土しているので，少なくともこの瓦溜りが中世以降に形成されたものでないことだけは確かである。さらに，この瓦溜りからは完形に近い，概して大きな破片が目立って出土しており，二次，三次移動は成されていないとみられる。なお，溝1と瓦溜りとの新旧関係は，



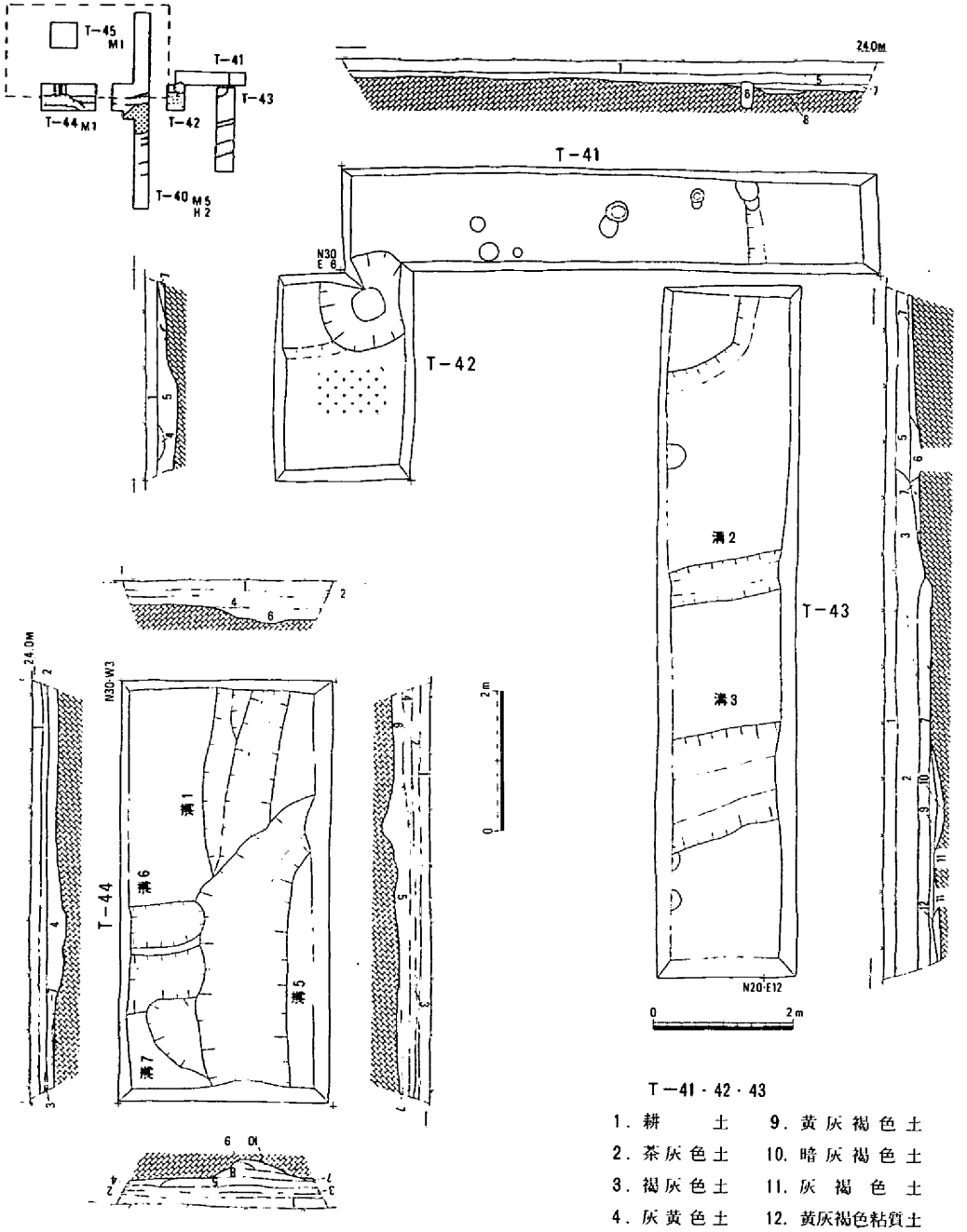
第10図　T－40平・断面図（S＝1/100）

土層断面でも明確に把握できなかった。また，溝２・３はＴ－43につながると思われ，溝の方向及び土層からいっても寺院関係の遺構とは考え難い。

Ｔ－44の溝１はＴ－40から続くと思われる溝で，ほぼグリッド方向に沿う。溝１，６，７は溝５に切られて存在する。溝５からは備前焼片が出土している。



第11図　Ｔ－40瓦溜り及び下部遺構　平・断面図（Ｓ＝1／50）



T−41・42・43

1. 耕　　土
2. 茶灰色土
3. 褐灰色土
4. 灰黄色土
5. 黄褐灰色土
6. 暗褐灰色土
7. 褐黄灰色土
8. 暗褐色土
9. 黄灰褐色土
10. 暗灰褐色土
11. 灰　褐　色　土
12. 黄灰褐色粘質土

T−44

1. 耕　　土
2. 橙灰色土
3. 淡褐灰色土
4. 灰褐色土
5. 淡灰黄土
6. 淡黄灰褐土
7. 淡灰黄土
8. 褐灰色土
9. 淡白黄色粘質土
10. 暗褐灰色土

第12図　T−41〜44　平・断面図（S＝1／100）

T－41では数個の柱穴状土壙と，T－43にかけて浅い段状遺構を検出しているが，寺院との関連は不明である。また，T－42に大型土壙が検出されたが，第3節でふれることとする。なお，T－45からは何らの遺構も発見できなかった。

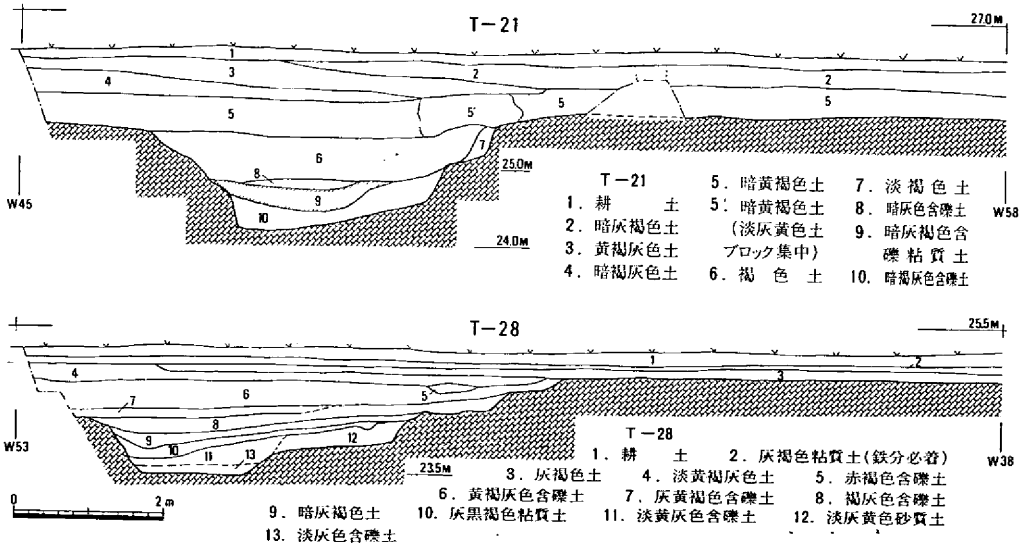
T－40瓦溜りからは，完形に近いものを含み，軒丸瓦5点，軒平瓦2点が出土している。

以上の状況から，この付近に寺院関係の建物が存在したにしても，ほとんど削平されている可能性が強い。

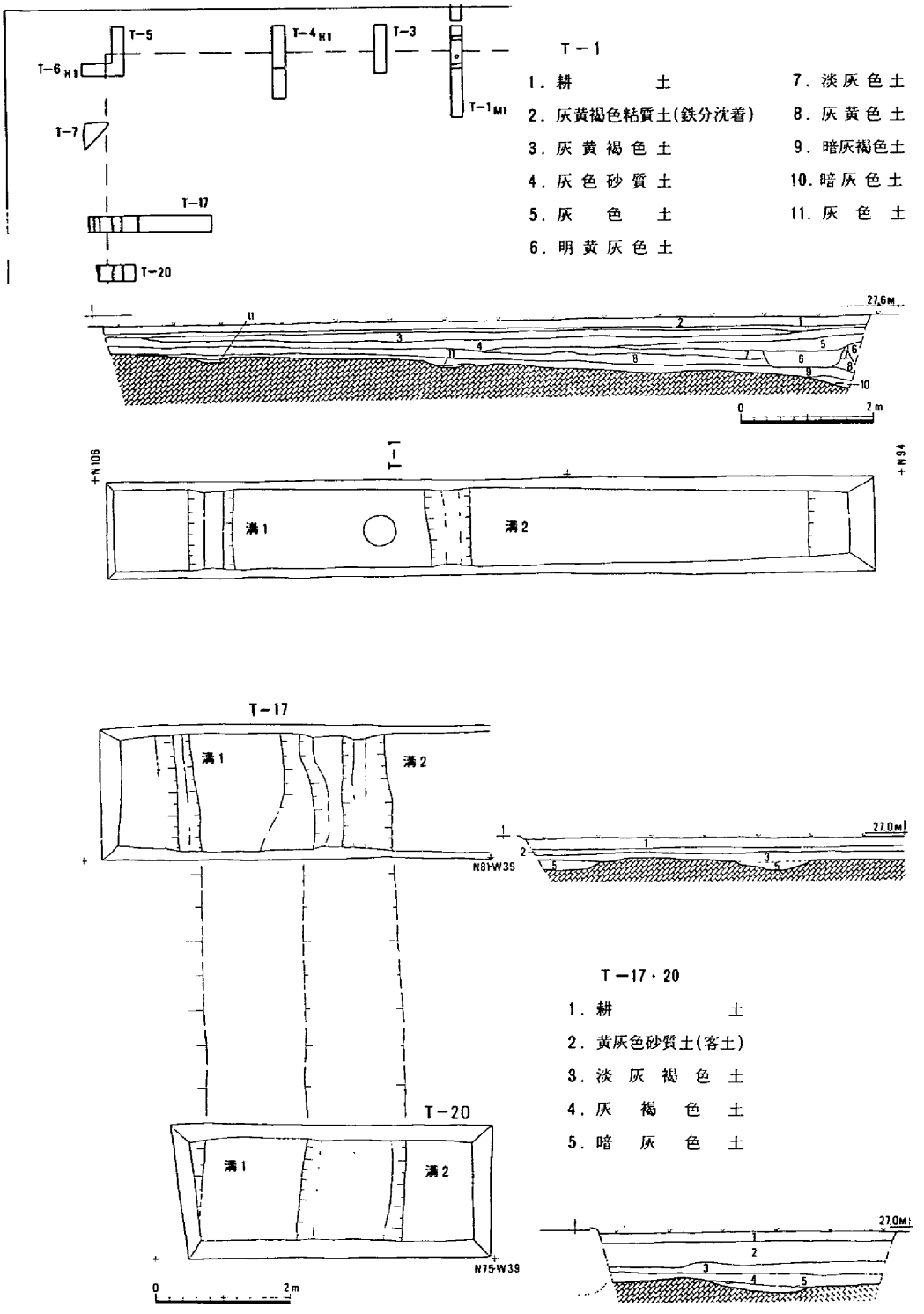
大溝及び築地状遺構

T－21，28，31で大溝を確認した。溝は，塔基壇の裾から西約10mのところを，北から南へわずかに蛇行して流下する（第5図 破線部分）。T－21断面観察では，2～5層は田の客土(造成土）であり，溝は現状で上幅4.5m，深さ1.3mを測る。溝の各層から瓦等の遺物が出土しているが，特に9層に須恵器・土師器等の溜りがみられた。これらは，7世紀後半から8世紀にかけてのものと思われ，したがって，この溝は寺院存続期間中に存在していた蓋然性が高い。また，T－28の断面では，溝の堆積土層が東肩部から西へ徐々に下がる状況が看取でき，これは溝底が一気に埋った後，東側（塔側）からの土砂の堆積で徐々に埋った形跡を示す。なお，瓦は8，9，10層中から比較的多く出土している。T－31では東側の溝肩部だけを検出したにとどまった。

また，T－21の西端近くにおいて，2層下部から金環が単独で出土している。

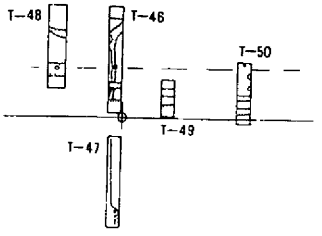


第13図　大溝（T－21，28）断面図（S＝1／100）



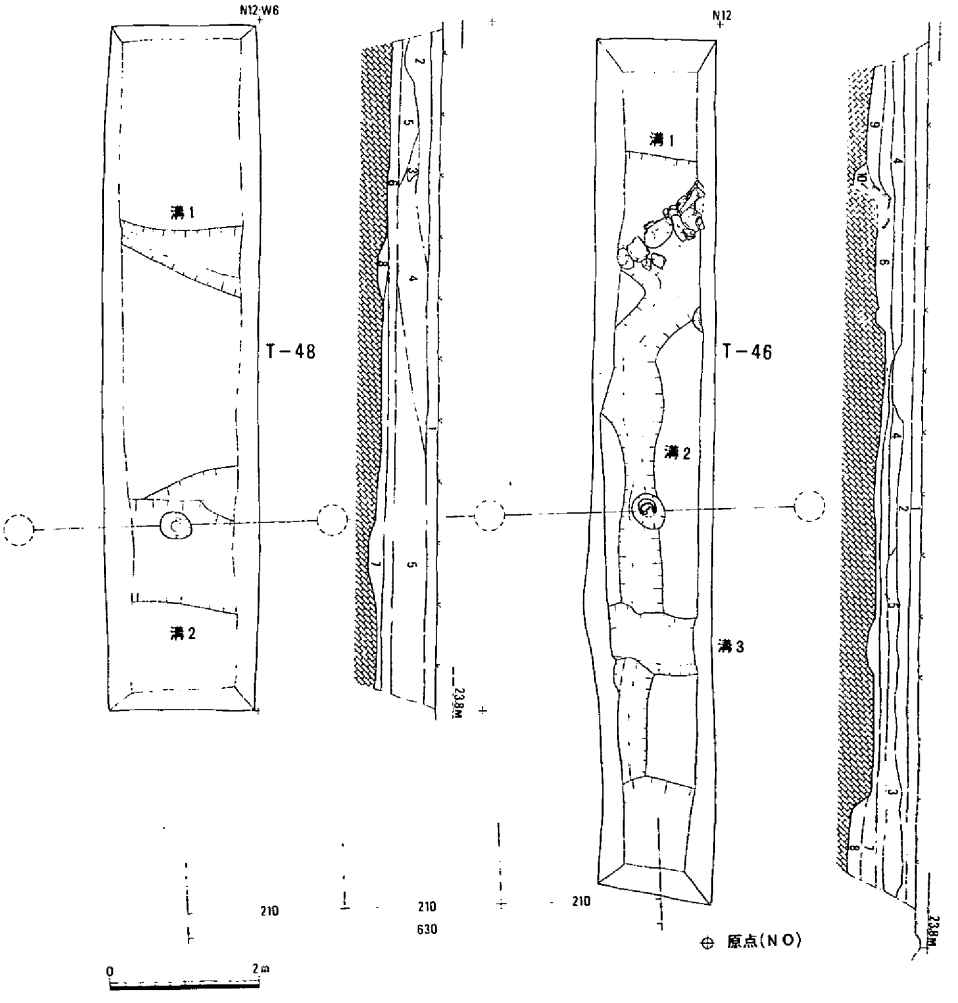
第14図　T－1，17，20　平・断面図（S＝1／100）

築地に伴うと思われる2本の併行した溝（1，2）がT－1，17，20の3カ所で検出された。いずれも大きく削平を受けているため，確証には至っていない。しかしながら，溝が真北を基準に設定したグリッドに平行または直交方向に存在し，また溝1，2の中心間がT－1で約3.6m，T－17で約3.3mを測り両者はほぼ同一規模であることなどから三者は築地の可能性が強



T－48
1．耕　土
2．褐灰色土（客土）
3．赤褐色土（客土）
4．灰黄褐色土(客土)
5．明黄灰色土(客土)
6．淡褐灰色土
7．暗灰色土
8．淡黄褐灰色土

T－46
1．耕　土
2．灰褐色粘質土(客土)
3．灰黄色土(造成土)
4．暗灰色粘質土
5．茶灰褐色粘質土
6．暗灰褐色小礫含土層
7．暗灰色粘質土
8．灰色粘土
9．青灰色粘土
10．灰褐色砂



第15図　T－46，48　平・断面図（1／100）

い。ただT－17，20の築地線を南下させれば大溝と塔との間を通り，一般的な伽藍配置で考えれば，回廊の存在，はては中門の存在も否定することになる。

一方，南門を想定してトレンチを設定したT－46～48では，特に関連する遺構は見出せなかった。しかし，時期ははっきりしないがT－46，48に柱穴を検出している。どちらも径約45cmを測り，底のレベルはそれぞれ22.8m，22.2mと60cmの差があるものの，両者間は6.3m（21尺）を測る。T46には柱根が出土し，T－48にはつめ石や底に小ぶりの礎石及び柱痕跡が認められた。それぞれの柱穴以外には直交する方向には他の柱穴が見つかっていないことから，二者が関連あるとすれば，寺域を示す柵列または塀の可能性もある。

なお，寺域をさぐるために設定した他の数本のトレンチでは，特に寺院の時期に関係すると思われる遺構は見つかっていない。

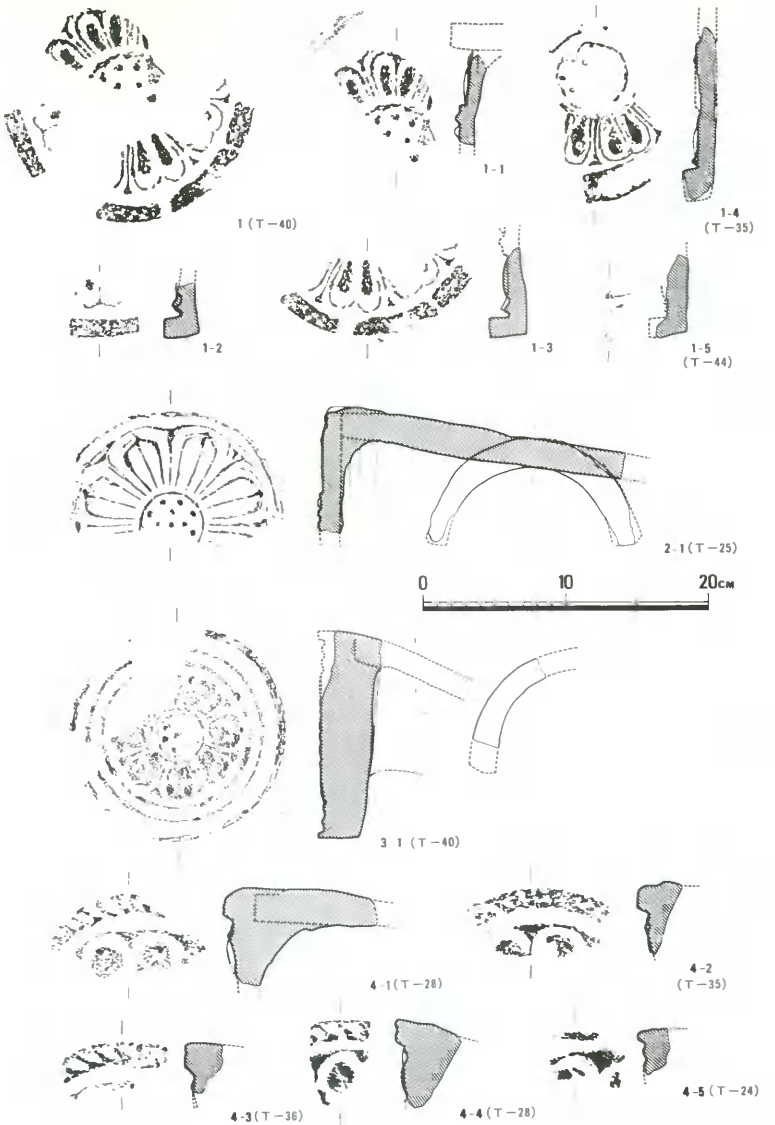
第2節　遺　　物

遺物は瓦が主体をしめ，整理箱にして50箱を越える。期間の関係で満足な整理を行っていないが，軒丸瓦7種類40個体，軒平瓦3種類11個体，鴟尾片4点(うち1点は塼の可能性もある)，台座片1点などを確認している（第1～3表参照)。その他瓦釘数本，鉄片及び寺院遺構には直接伴わないが7世紀後半かけ8世紀にからての少量の須恵器，土器などが出土している。以下，項目ごとに若干の説明を加えてみたい。

I　瓦，　鴟尾

軒丸瓦（第16～18図，図版10～12）

1類（第16図1－1～5）　複弁8弁蓮華文である。1－1～3は固まって出土したもので形態・胎土焼成などから一個体分とした。いずれも色調は灰白色で，焼成もよい。1は凸中房に1＋6＋12の蓮子を配すと思われ，外縁は比較的細く高い。子葉は中央が高くて厚く，間弁は外縁側の端部のみ高く，平担になって中房に達する。1－1の内区端面（瓦当側面）に残る布目痕は，接合時の圧着によって，丸瓦の凹面の布目が瓦当側についたものと考えられる。これは，接合時に丸瓦をさし込むための溝が瓦当面ぎりぎりまで至っていたか，T字形に接合したかのどちらかを示している。1－4は中房の一部と蓮子の大部分が磨滅して明確でないが，他の文様的特徴も含めて，1－1と同形態と思われる。しかし，中房径は1と比べひと回り小ぶりで，外縁幅が広いなどに多少の差異が認められる。胎土に1～8mmの砂粒が目立つ。1－5



第16図　軒丸瓦　1～4類（S＝1／4）

は，外縁の幅から1に属すると思われる。瓦当裏面はいずれも丁寧な押圧とナデで調整されている。

以上，1類は多少の差ながら2類型に細分でき，前者（1，2－5）を1a類，後者（1－4）を1b類としておく。

2類（第16図2－1）　この種の軒丸瓦は1個体のみ出土した。単弁8弁蓮華文である。円形の突線で示される中房の中には，1＋4＋8の蓮子が配される。蓮弁・間弁ともに比較的ほりが浅く，蓮弁中央には子葉が細い線で表現されている。蓮弁と間弁の一部に笵のみだれが認められる。外縁は幅も狭く平担である。接合瓦当裏面上部には，丸瓦の端面をあててつける方法が執られている。胎土に3～6㎜の砂粒を含み，白灰色を呈す。焼成は良いが，全体のつくりは雑である。

3類（第16図3－1）　2類と同様に1個体のみ出土している。単弁8弁蓮華文である。内区の文様は平面的である。中房は沈線で表現されている。蓮子は中央部と外側を統る3個しか確認できないが，その位置から1＋6と考えられる。外区内縁には重圏文を統らせ，それより内区中心に向って高くなっているため，蓮弁は弁先に近い部分で多少肉厚にみえる。また中央部に向ってわずかに高く表現されているのは，子葉を意識していると思われる。外縁の幅は狭い。瓦当幅は1・2類に比べて非常に厚い。接合は切り込みによっている。接合しやすいようにつける刻み目は，瓦当面の切込下部にみられる。灰色を呈し，焼成良好。胎土に長石が目立つ。

4類（第16図4－1～5）　いずれも破片のみである。4－1での復原によれば蓮弁は8弁の可能性が強い。蓮弁は比較的肉厚で，間弁どおしはつながっている。子葉の表現は特にない。4－1～4には，外縁には斜め方向の刻み目を配している。4－5は前者に比べ外縁が狭く，刻み目はない。いずれも，淡灰褐色あるいは淡黄橙色を呈し，焼成は良くなく軟かい。胎土に大粒の砂粒を含むものもみられる。4－1の接合は，瓦当への切り込みによっている。

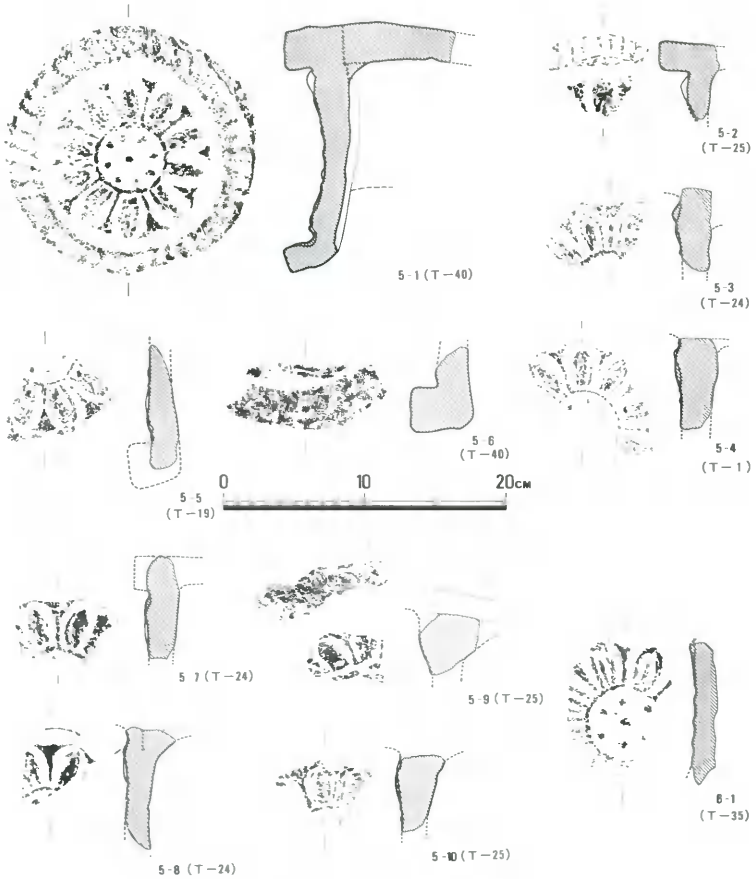
5類（第17図5－1～10）　単弁10弁蓮華文である。蓮弁に子葉がありさらに間弁の先が高いものと，それほど凹凸がなく丸味をもつものの2種に細分される。前者（5－1～6）を5a類，後者（5－7～10）を5b類とした。5－1は，中央部がわずかに凹み，ひずんでいる。中房は突線で表わし，蓮子は1＋8である。凹みのためか，間弁の高いのが目立つ。また，外縁は厚くて高く，4類より広めの刻み目を統らせている。接合のための切り込みは，比較的浅い。5－6には外縁の刻み目はない。

5b類（7～10）はいずれも破片であるが，蓮弁の規格，中房の大きさなどは5a類と同じとみてよい。5－9の蓮弁側端部には布目痕がついており，丸瓦の取り付けが深かったことを示している。

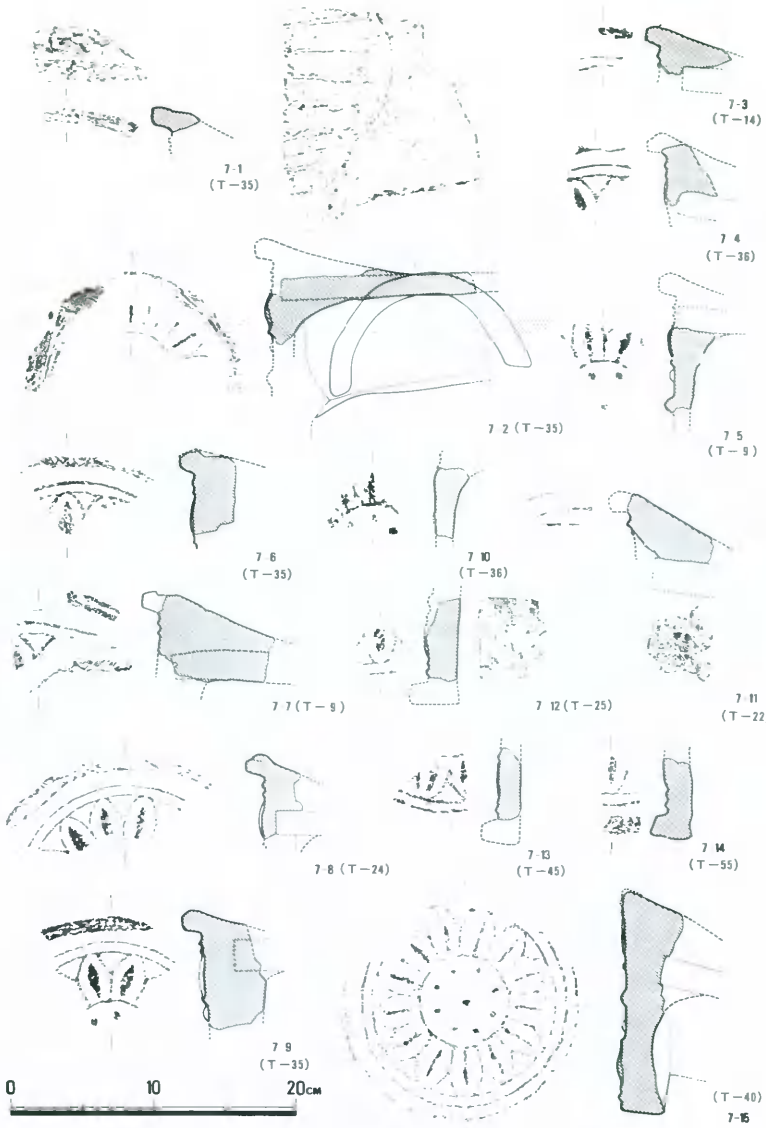
5類は，いずれも淡灰褐色または淡黄橙色を呈し，大きめの砂粒が散見できる。全体的に焼成はあまり良くない。

6類（第17図6－1）　1個体のみ出土した。復原では単弁8弁になる。中房は突線で施され，蓮子は1＋6である。蓮弁，子葉ともに，中房と同様に突線で表現されている。間弁は中房まで達している。胎土に大粒の砂粒を含む。灰白色を呈し，焼成はやや不良である。

7類（第18図7－1～15）　調査で出土した軒丸瓦の中では一番多い17個体を数える。出土



第17図　軒丸瓦　5・6類（S＝1／4）



第18図　軒丸瓦７類（S＝1／4）

項目 / 類型	瓦当面												全長
	直径	内区					外区	外区					
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁			
								幅	文様	幅	高	文様	
1 a 類	(177)	62	(1+6+12)	132	40	複 8	17	無	無	17	10	無	—
1 b 類	(170)	53	—	124	37	複 8	22	無	無	22	12	無	—
2 類	164	44	1+4+8	150	30	単 8	9	無	無	9	2	無	—
3 類	145	31	1+(6)	93	23	単 8	25	19	圏線	6	5	無	—
4 類	(160)	—	—	—	30	単(8)	28	5	無	23	7	斜刻	—
5 a 類	168	50	1+8	117	18	単 10	25	無	無	25	19	刻	—
5 b 類	—	(50)	(1+8)	(117)	18	単(10)	—	—	—	—	—	—	—
6 類	—	52	1+6	—	22	単(8)	—	—	—	—	—	—	—
7 類	(185)	63	1+8	123	23	単 13	(28)	12	圏線	(16)	(13)	無	—

（　）は推定　　（単位mm）

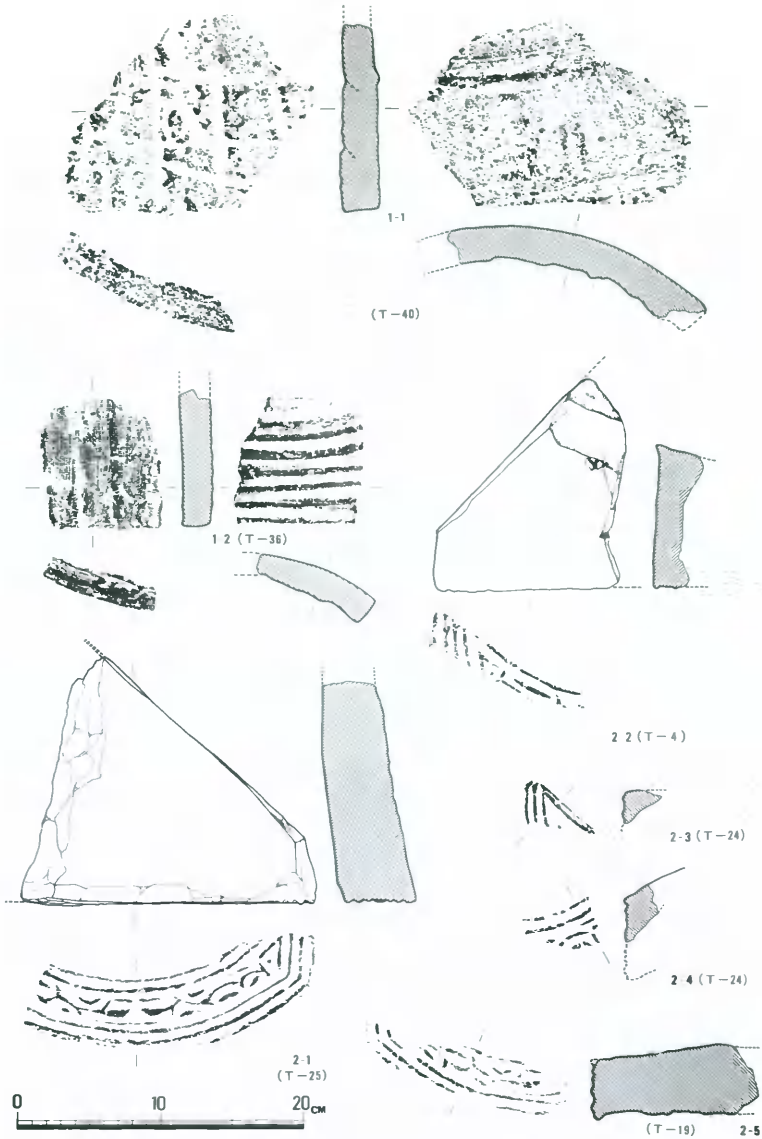
第1表　軒丸瓦計測表

地点は金堂推定地に7個体と多い。単弁13弁蓮華文である。突線で表現された中房内には，1＋8の蓮子が認められる。蓮弁は細い突線で表現され，間弁は退化している。外区内縁には圏線が続る。外縁は直立し比較的高いもの（7－1，3，6～8）と，幅と高さのほとんどないもの（7－15）がある。全体的には破片が多いが，接合の観察には格好の資料である。7－15の瓦当裏面には，上部端から約3cmも下に円孤状の接合線が残る。また，7－2は丸瓦の凸面に平行線状の刻み目を施している。7－11には丸瓦の凸面に施された格子状の刻み目がプリントされて残る。いずれも灰白色または灰色を呈し，胎土は緻密，焼成はやや不良である。

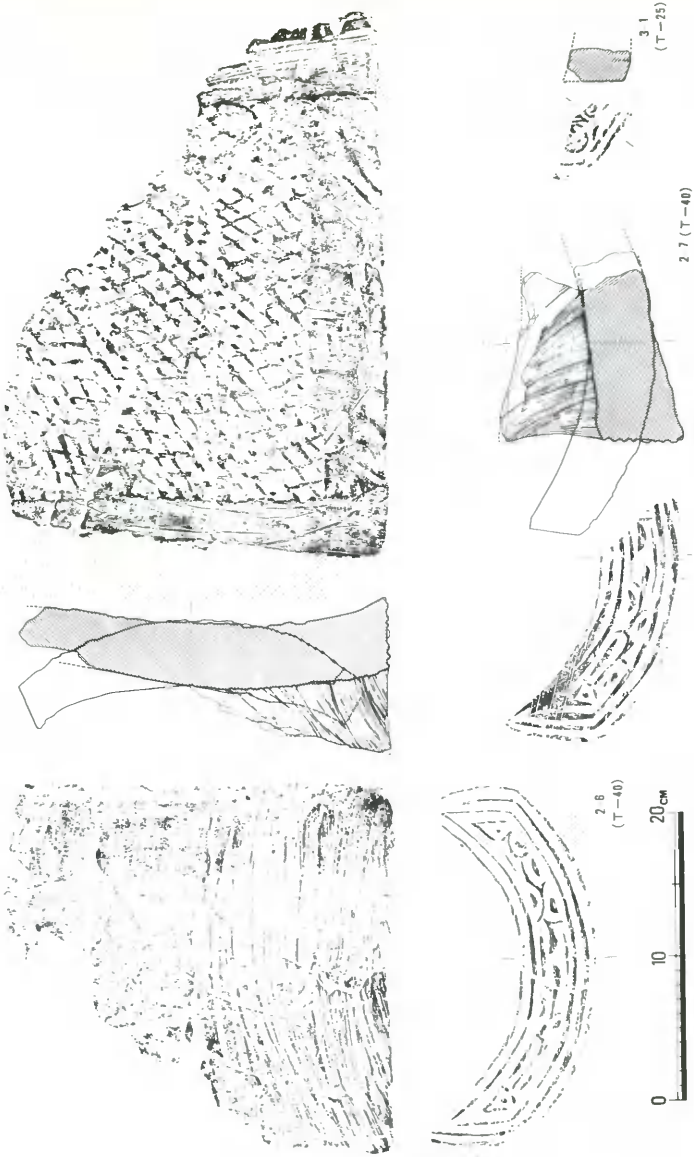
軒平瓦（第19・20図，図版12～13）

1類（第19図1－1，2）　瓦当面に文様を施さない，いわゆる平瓦と同じものである。ただ，瓦当寄りの凸面に1条（1－1）～7条（1－2）の突帯を施し，それが文様を意識していると思われ，他の平瓦と区別して軒平瓦とした。1－1の凹面には圧痕と一部に布目，板目，さらに粘土紐接合痕跡が認められることから，粘土紐巻きあげによる桶巻作りであろう。1－2の凹面は瓦当にあたる端面まで布目がみられ，板圧痕も顕著に残る。他にも図には掲載していないが，凹面の瓦当面寄りのところに板目を残すものも1～2点あり，軒平の可能性がある。1－1・2はともに淡黄橙色を呈し，焼成は良くない。胎土に砂粒の大き目のものが目立つ。

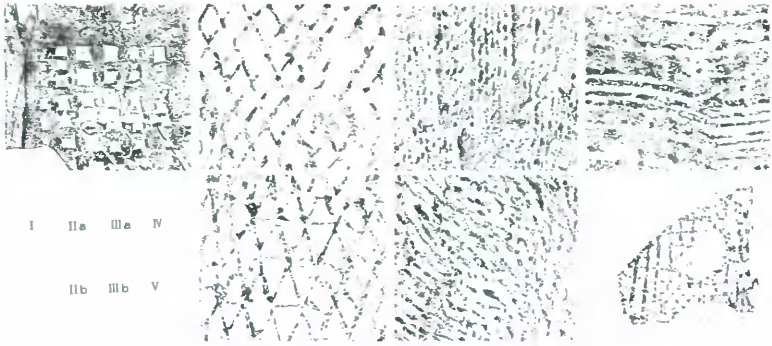
2類（第19図2－2～5，第20図6，7）　軒平瓦の中では一番数多く出土している。いずれも瓦当面の文様は同笵である。内区の文様は唐草文を意識したものと思われるが，かなり抽



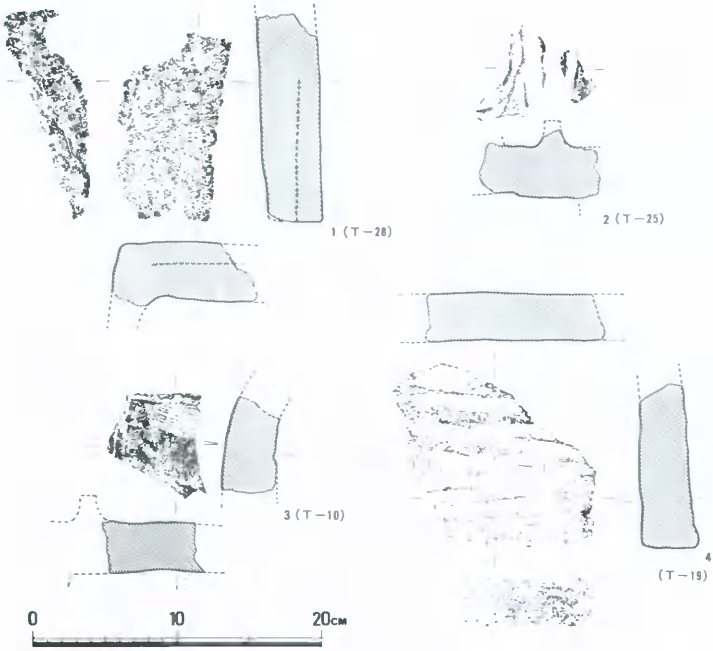
第19図　軒平瓦　1・2類（S＝1／4）



第20図　軒平瓦　2・3類（S＝1　4）



第21図　平瓦各種叩き目（S＝1／3）



第22図　鴟尾（S＝1／4）

象化されている。いわゆる中心の垂飾りは無く，左右に展開する唐草の文様が上下逆転して配されている。文様自体が均正唐草文と呼称してよいかどうかわからないが，ここでは一応変形均正唐草文としておく。上下外区及び脇区は，内外区を区画する界線も含めて2～3条の突線で表現されている。それらの突線は，笵そのものには3条の線が彫られていたものが，2－6・7に顕著にみられるように荒い篦削りによって．特に上部の突線が消滅したと思われる。また，いずれも破片以外の平瓦部凹面には布目と瓦当寄りの一部に篦削りとナデ，凸面には格子叩き目と篦削りが観察される。また，軒平瓦としては数少ない隅切瓦が2個体（2－1・2）出土している。それぞれ右側と左側が，瓦当から約5cmくらいのところから約40～45度の角度で切られている。色調は全体に茶灰色～黄橙色を呈し，焼成が特に良好なものはない。2－6・7などはひび割れが顕著であり，二次的に火を受けた可能性がある。胎土は1類と差はない。

3類（第20図3－1）　1点のみ出土している。破片から推定して小づくりである。内区は均正唐草文と思われ，主葉は2類が直線的であったのに比べて円弧を描き，備前国分寺の軒平瓦Ⅲ型式（註1）に似ている。外区には文様はなく，全体に掘りは浅い。灰白色を呈し，胎土は緻密，焼成も良好である。

丸瓦・平瓦（第21図）

これらの瓦は多量に出土しているが，完形に近いものが少なく，全長を示すものはない。

丸瓦は図示したものはないが，玉縁と行基の2種類を認めた。どちらも凹面には布目が残るが，凸面には文様的な叩きはみられない。

平瓦はいずれも凸面に叩き目による文様，あるいは叩き施行後刷毛目（板目）で調整された跡を残す施文具（叩きの道具）の違いにより，大きく4種類にわけられた。

Ⅰ類は約7cm四方の板状工具で施文されたもので，6～8mm四角の穴が並ぶ感じの格子目（穴の数は36個くらいか？）が表現されている。これらが全面に連続して施されるものはなく，ところどころに散見されるものが多い。この種の瓦は灰色を呈し，堅緻で焼成が良い。凸面の側

項目 / 類型	瓦当面											全長
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	下外区厚さ	外区文様	脇幅	文様深さ	
1　類	—	—	—	20	無	無	無	無	無	無	無	—
2　類	237	63	246	54	26	変形均正唐草	14	14	突線	16	3	—
3　類	—	—	—	(42)	—	均正唐草	—	9	突線	11	1	—

（　）は推定　　（単位mm）

第2表　　軒平瓦計測表

瓦	出土 ＼ トレンチ	T－1	T－4	T－6	T－9	T－10	T－14	T－19	T－22	T－24	T－25	T－28	T－35	T－36	T－40	T－44	T－45	T－55
軒丸瓦	1 a 類														1	1		
	1 b 類												1					
	2 類										1							
	3 類														1			
	4 類									1		2	1	1				
	5 a 類	1						1		1	1				2			
	5 b 類									2	2							
	6 類												1					
	7 類				3		1		1	1	1		6	1	1		1	1
	不明										1			1				
軒平瓦	1 類													1	1			
	2 類		1	1				1		2	1				2			
	3 類										1							
鴟尾						1		1			1	1						

数字は個体数，鴟尾については点数

第３表　軒瓦・鴟尾出土トレンチ及び類型別出土個体数一覧表

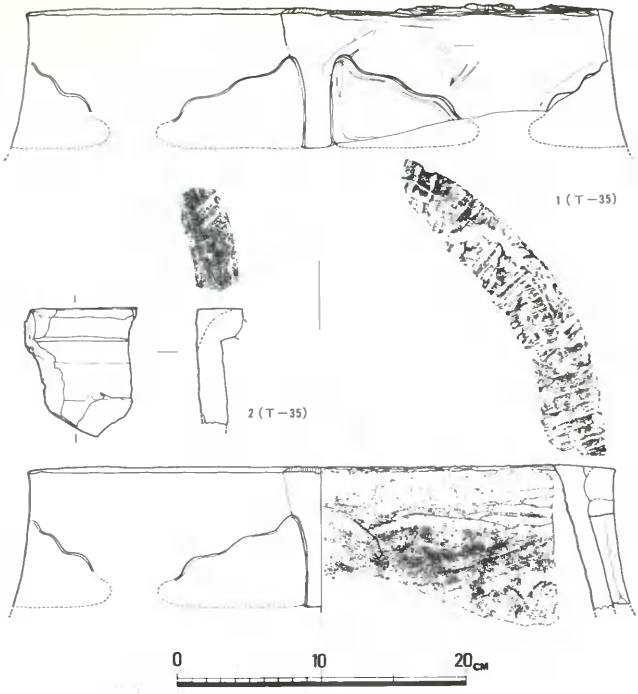
端部は面取りされ，凹面の布目は他と比較して細かいなどの特徴がある。また，桶巻作りを示す板痕跡が顕著に残る。

II類はいわゆる斜格子文の叩き目を施すもので，格子の中に突線が加えられ，三角形にみえるものもある。前者をII a 類，後者をII b 類とした。出土瓦中IIa類が最も多い。I 類のように側端部の面取りは顕著ではない。どちらも施文は凸面ほぼ全面に施され，さらに連続しているため工具の単位は不明である。凹面に板痕跡がみられないため，一枚作りの可能性が強い。胎土・焼成はあまり良くない。

III類は縄叩き目を施したものである。縄目が細くて整然と施されるものと，太くて荒く，雑なものがある。前者をIII a 類，後者をIII b 類とした。III b 類の出土は少ない。どちらも一枚作りの可能性が強い。焼成は良好なものが少ない。

IV類は平行叩き目を施した後，同じような工具でナテて板目痕を残す，数は少ない。凹面の板痕跡は不明である。凸面の板目状のものが文様を意識していると見るならば，軒平瓦の可能性もある。

以上，大別される４種類のみ言及したが，図示していないものの中にも格子・斜格子の細かな文様の施されたもの等もあり，II c 類に入れても良いが，ここではその他としてV類としておく。



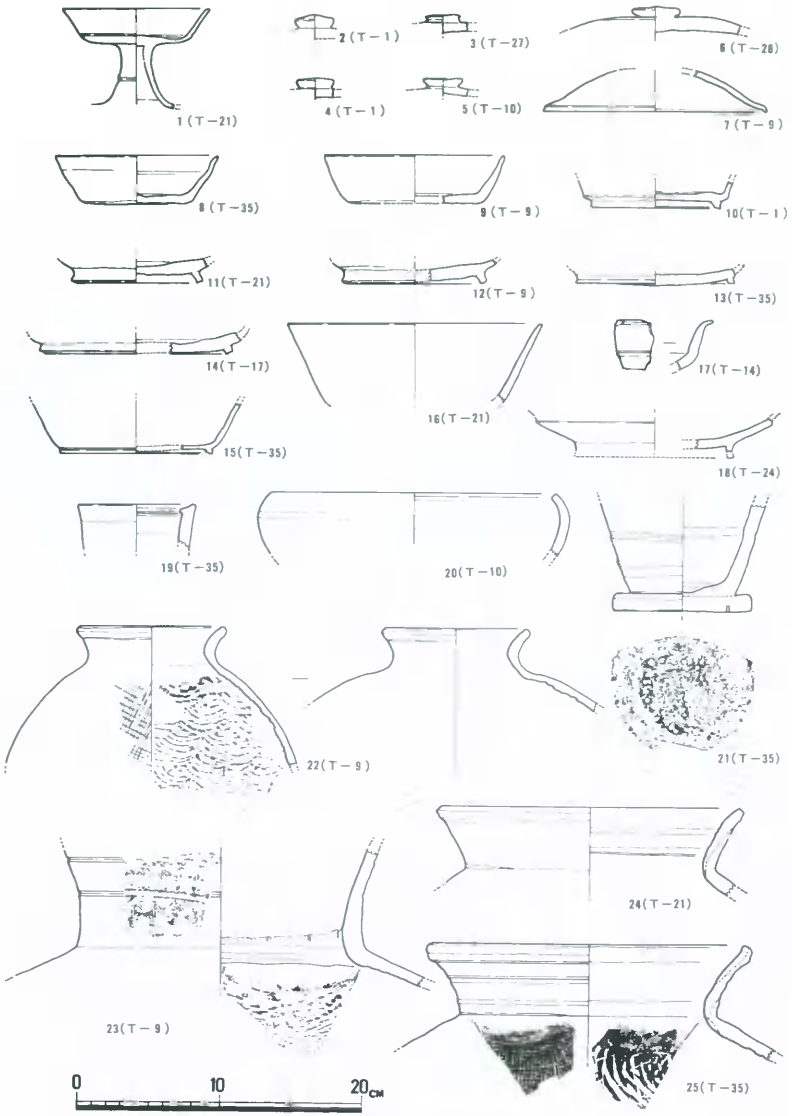
第23図　出土遺物（1）（S＝1／4）

鴟尾（第22図1～4）

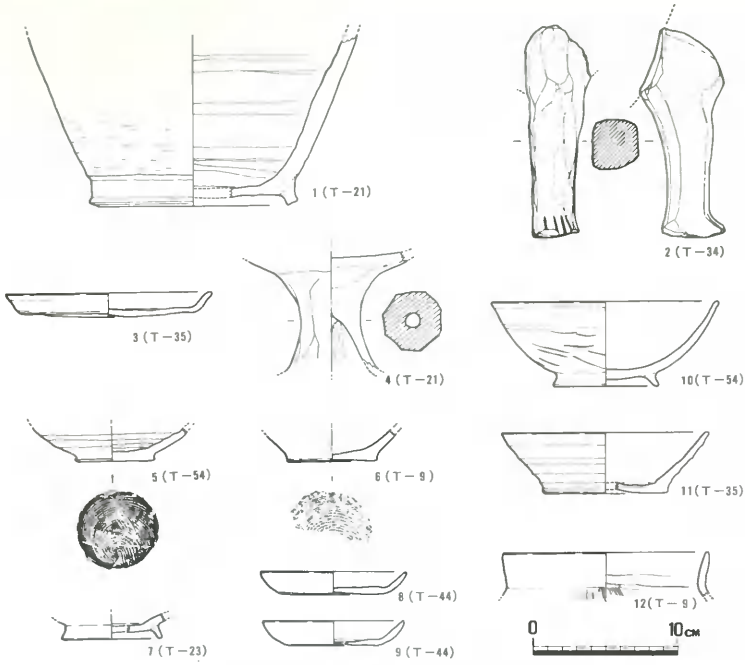
4片の出土をみた。3が須恵質をしているほかは瓦質である。4は端部に布目を残す。塼の可能性もある。1はコーナー部分であり，頭部の基底部であろう。3は彎曲しており頭部に至る部分であろう。表面には板目が残る。2は縦帯と鰭部にかかる部分の破片である。鰭の部分は欠損しているが，ナデの残り具合から邑久町宮嶋窯跡（註2）出土の鰭部に似ると思われ，寒風（註3）近くで焼かれた可能性がある。4が鴟尾だとすれば，腹部の基底部であろう。いずれも胎土に砂粒が目立つ。

Ⅱ　その他の遺物

台座（第23図，図版15）



第24図　出土遺物（2）（S＝1／4）

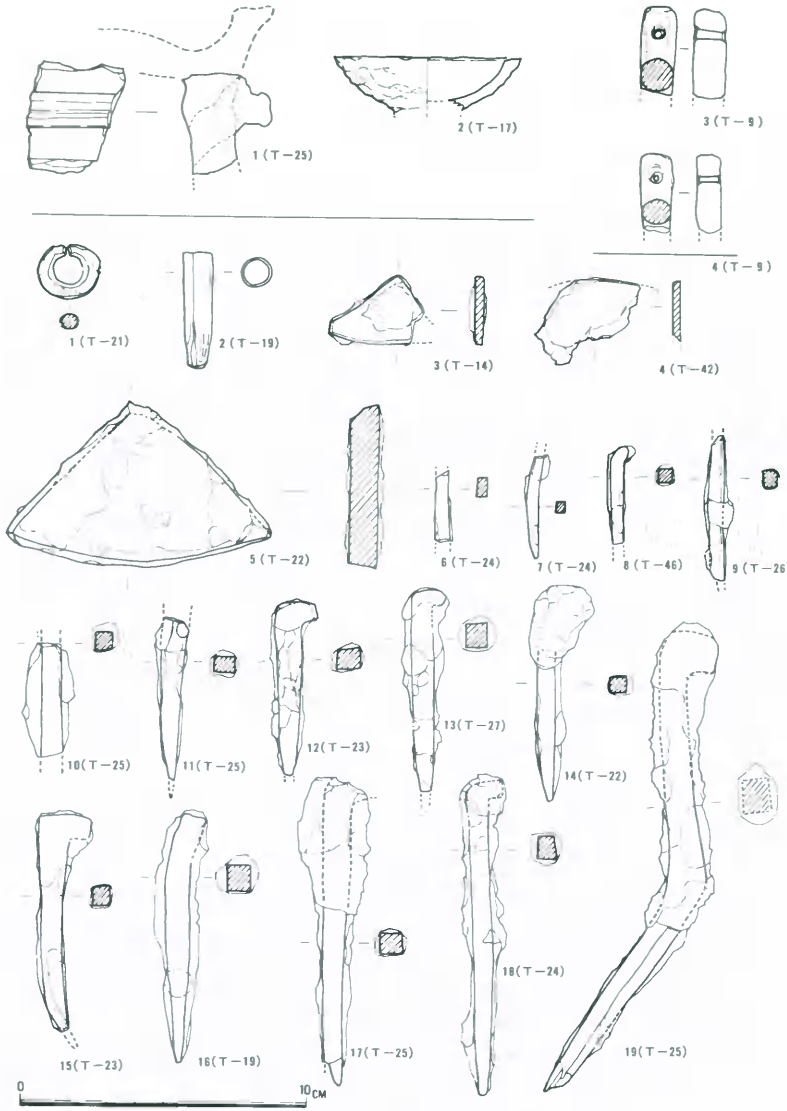


第25図　出土遺物（3）（S＝1／4）

1，2ともに金堂推定地近くのT－35から出土した。1は上端で直径約40cmを測り，円形フランをもつ。側面は台形を呈す。体部は厚さ約1.3cmの粘土を貼合わせて，側面に格狭間のような文様が作り出されている。外側の貼付け部分の断面では，輪積痕が顕著である。径から割り出したところでは，文様は1単位が4区にわかれて存在する可能性が強い。上端部には篦切り痕跡，あるいはその上に貼付け痕跡が観察され，上部に円盤か何かを乗せて貼合せていたことを想像させる。下部は破損によって不明であるが，上部と同様の文様が配されていたとすれば，高さは少なくとも1尺（30cm）はあったものと推定される。内外面ともに指ナデによる調整がみられるが，内面は荒い。胎土に長石・石英粒が目立ち，焼成・色調からいえば須恵質である。2は小片であるので1と同種のものかどうか不明であるが，外面が多少弧を描き，形態が1に似るのでここで取扱った。胎土・焼成・色調ともに1に似る。

須恵器・土師器（第24～26図1，図版14・16）

これらの土器は，遺構に伴って出土したものはない。紙面に限りがあるので，ここでは個々



第26図　出土遺物（4）（S＝1／2）

についての詳しい説明を省略し，概略を記す。

須恵器はいずれも破片のみで，完形に近いものはない。第24図1，21，22，25などは，寺院創建以前の可能性が強い。また，17・18の稜椀は平安時代のものである。なお，19は高台の可能性もある。他の須恵器は，7世紀末～8世紀とみて大差はない。第26図1は円面硯か。

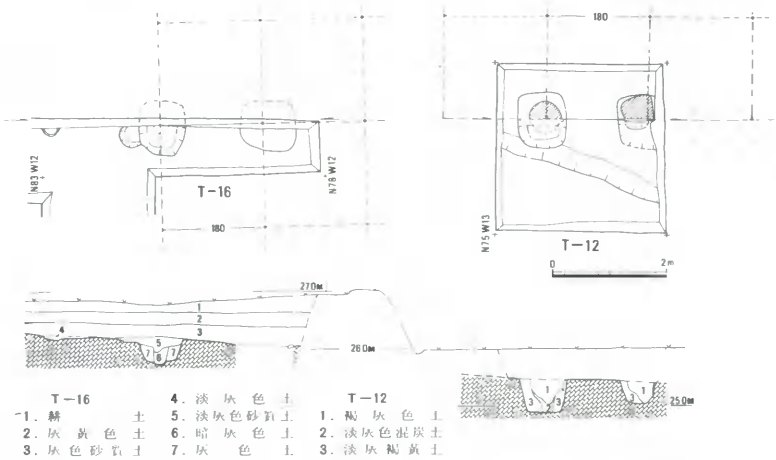
土師器は皿，杯，高杯，椀などが出土している。3・4は奈良時代，5・6・10・11は平安時代とみてよい。10は黒色土器，2は土師質の獣足である。獣足は，箆状の刻みで指を表現している。3・4を除く遺物については，寺院廃絶後とみた方が良いかもしれない。

金属器（第26図下1～19，図版16）

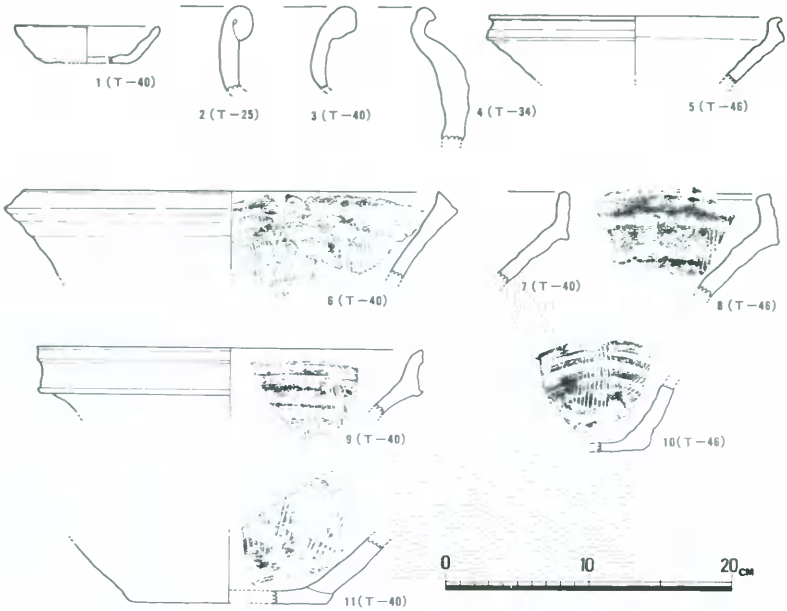
金環（1），銅製品（2），鉄器（3～19）が出土している。1は鉄地金銅張り，2は銅板をまるめて筒状にし，一方の端を細く閉じさせている。筒の中からは，内壁に密着して麻紐が確認された。5は塔の瓦溜り出土であり，端部は折れたものではない。6～19は，いずれも断面が方形あるいは長方形を示す釘である。そのうち，大型のものは瓦釘であろう。

第3節　寺院以外の遺構・遺物

遺構としては掘立柱建物（第27図），石組（第15図T－46），大型土壙（第12図T－42）などがある。掘立柱の大型のものはT－12，16で検出した。いずれも一辺70～90cmの方形に近いプランを有し，それぞれの柱間は180cm（6尺）を測る。4つの柱穴はほぼ一線上に並ぶため，



第27図　T－16，12遺構　平・断面図（S＝1/100）



第28図　出土遺物（5）（S＝1／4）

一連の建物とも考えたが，両者の位置関係及び底のレベル差（約80cm）からは別の建物の可能性が強い。なお，それぞれの柱穴掘方から瓦片が出土しているため，少なくとも寺院創建前の存在は考えられない。また，一般的には寺院の存続期には瓦葺きの建物であったと思われ，これらの建物の存在は寺院廃絶後であろう。一方，石組については，石組周辺及び北側の溝から備前焼（5・8・10）などが出土しているため，中世末の遺構と思われる。大型土壙はほかにT－52にもみられ，いずれも鎌倉期の三足鍋片を伴っている。

遺物としては，青・白磁（第26図上2，図版16），備前焼（第28図），染付などが出土している。さらに，鎌倉期と思われる7の椀や8・9の皿（第25図）などもある。

註1　伊藤　晃「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告10』岡山県教育委員会　1975年

註2　伊藤　晃『新林（宮嶋）窯址の調査報告』邑久町教育委員会　1974年

註3　山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27』岡山県教育委員会　1978年

第4章　結　　語

岡山県下における古代寺院については，昭和初期から先学により研究・公表（註1）され，その後，特に1970年代から，開発に伴いあるいは開発に先立つ発掘調査がふえ，その保存，研究の両分野において多くの成果が報告されている（註2）。吉岡廃寺は，畦畔に残る礎石と散見される布目瓦の存在が知られるのみで，寺域や伽藍配置，寺院時期などはほとんど不明であった。調査の結果，遺構全体の残存状態はかならずしも良好とはいえなかったが，塔跡が比較的保存が良く，また，軒丸瓦，軒平瓦，鴟尾片なども多数出土し一応の成果があったと思われる。以下，全体的に想定・推定の域を出ないが，2・3の項を掲げまとめにかえたい。

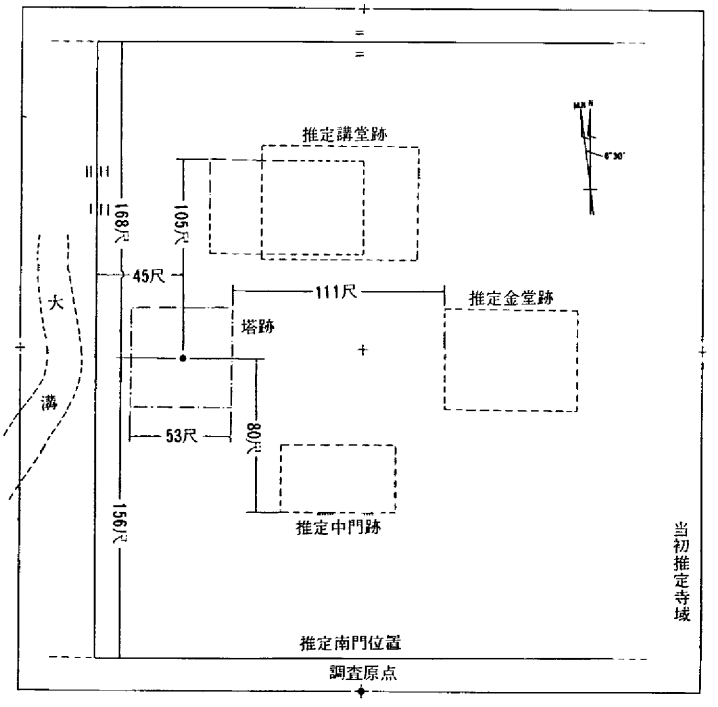
遺構・遺物からみた創建と廃絶

遺物は第3章で述べたように，弥生土器，古式土師器及び6世紀以前の須恵器を除き，桃山時代までの各種遺物が出土している。それらの遺物の中で，遺構に伴って出土したものは少ない。瓦でいえば軒丸瓦9種7類，軒平瓦3類の出土をみ，調査範囲が限られたトレンチ調査であることを加味しても，使用軒瓦はだいたいそろったのではないかと思われる。ただ，軒丸瓦の種類の多さに比べて軒平瓦が3種類しかないことが気になるが，2類がかなりの期間中心的に使用されたと考えられる。また，丸瓦については，玉縁と行基の2種，平瓦については凸面の叩き目文様が少なくとも5種類に分類できることなどが判明している。

寺院址の場合の時期判定のむずかしさは，瓦の差し替えあるいは建物自体の建て替えなどが予想されるため，後世の削平頻度にもよるが，廃絶後の堆積から，同一層から出土する遺物が同時期であるという見方ができないところにある。しかし，例えば塔の東側T－24のように深く堆積している場所では，所見ではあるが下層に平瓦叩き目Ⅰ類の瓦が目につき，上層にⅢa類が目につくという傾向は指摘できる。平瓦凸面の叩き目（第21図）を凹面の布目と第一次整形との関連でみると，Ⅰ類（格子）は桶作りであり布目が細かく，Ⅱ類（斜格子）とⅢ類（縄目）は平作りの可能性が強く，布目はⅠ類より粗い，などが観察される。量的には3者はほぼ同じであるが，新旧関係はⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類を考えうる。また，平瓦叩き目Ⅱa類は，軒平瓦2類に例外なく施されており，軒平瓦2類が他に比べて多く出土しているところから，ある時期の主流をしめる瓦であったことが考えられる。しかし，軒平瓦2類の文様は，「変形」均正唐草文とも言うべきもので，他に類を見ない。この文様を唐草が退化したと捉えるか，独自の文様と捉えるかによって時期判定がむずかしいところである。ただ，軒平瓦としては1類が素縁であることから2類に先行し，3類は差し替え瓦の可能性もあり，2類に後出すると思われる。

軒丸瓦は7類のうちそのほとんどは県下近隣に同笵または類似を求めにくい。1類から4類の新旧関係は不明であるが，蓮弁や間弁の特徴，中房の大きさ，蓮子の数や配列，接合の状態からすれば，これらの中の瓦が創建時またはそれに近い時期の瓦とみてよい。7類は比較的多く出土している。7類は間弁の退化，丸瓦接合の位置が下がるなどの特徴から，出土軒丸瓦の中では最も下るとみてよい。瓦当の文様は県下で数多く見つかっている平城宮軒丸瓦6225型式（註3）の亜型式（註4）に似る。6225型式の蓮弁は複弁であり，また複弁の間弁が退化した一連のものを亜型式と呼称されている。しかし，7類は単弁であり，間弁はなく内外区の界線である圏線が蓮弁の先に密着するという違いを見せる。ただ，美作国分寺出土の軒丸瓦II型式a種（註5）は7類と類似点が多く，美作の6225系の退化傾向と備中の同傾向には差があると思われる。5・6類は間弁が退化しきっていないところから，7類に先行する可能性が強い。また，軒丸瓦と軒平瓦のセット関係は不明であるが，今のところ軒丸1～4類と軒平1類・平瓦叩き目I類，軒丸5～6類と軒平2類・平瓦叩き目II・III類，軒丸7類と軒平2・3類・平瓦叩き目III類の可能性を考えている。

以上をふまえ，おもに軒丸瓦の特徴から創建は白鳳後期，廃絶は奈良時代末か平安時代初めが考えられる。そして，塔基壇の版築の中に平瓦叩き目I類を含むことから，存続期の中でも比較的古い時期に少なくとも1回は建て替えが成されたことがわかる。



第29図　寺域及び伽藍配置想定図（S＝1／1200）

伽藍配置と寺域

今回調査の最大の成果の一つに，塔跡が確実に把握できたことがあげられる。残念ながら，後世の削平によって平面的には約⅓を失い，また礎石の大部分は検出し得なかった。しかし，塔基壇の規模，版築の方法，地形の利用方法などの点に収穫があった。全体的には遺構の残存状態は不良であり，塔の位置と各トレンチで検出した瓦溜りや溝の状況などから，伽藍配置及び寺域を想定せざるを得ない。

また，このことは第３章第１節で多少触れてきたところである。

第29図では，トレンチ調査の結果をもとに，法隆寺式伽藍配置及び寺域を想定した（註６）。この寺院の地業が真北を基準にしていることは，塔基壇の方向からしてまちがいない。塔以外の建物の位置・規模については，検出資料を最大限に使用した上での推定である。寺域は，Ｔ－１，17，20，46，48で検出した遺構を築地あるいは柵か塀として想定した場合には，南北324尺，東西ほぼ同尺が考えられる。しかしながら，大溝を取込まない寺域を考えると，大溝と塔の間隔が狭いため回廊の続る予地がなく，中門の存在を否定することになり，法隆寺式の伽藍配置そのものも考え直す必要性がでてくるなど問題が多い。一方，当初真北方向に残る２本の畦畔をもとに想定した方一町の寺域に近く，例えばＴ－17，20の溝を築地以外の遺構とすれば，塔の位置を主として考えられる伽藍は，法隆寺式に比定されてくる。今一つ推定が許されるとすれば，講堂も再建の可能性があるため，創建時には内側の寺域であったのが，塔再建時に方一町に近い寺域を画し，法隆寺式の伽藍をもつに至ったことも考えられる。

今後の課題

以上，おもに寺院関係の遺構・遺物から考えられることについて可能な限り記してきた。しかし，例えば軒丸瓦でいえば，近隣に例を見ない独自の文様をもって白鳳創建された寺院が，奈良時代後半に至って急に美作風平城宮6225系の退化した瓦を受け入れた背景は何なのか，またそのことが，第１章でふれた当時の社会情勢の中での行政界の変化・変遷の一つに符合するのかどうか，などについて言及し得ていない。また，寺院廃絶後の遺構・遺物の有り方（削平を何度か受けていることの意味を含む）についても同様である（註７）。

いずれにせよ，期間的に整理も十分でなく，より詳細な検討は今後に待ちたい。

註１　玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』1929年，同２輯　1941年，永山卯三郎『岡山縣通史・上編』1930年など。

註２　備前・備中・美作の各国分寺及び，久米廃寺，楢原廃寺，大海廃寺，栢寺廃寺，英賀廃寺，賞田廃寺，幡多廃寺などの調査が，県教育委員会，岡山市教育委員会，津山市教育委員会によって実施されている。

註３　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告II』　1962年

註４　中野雅美「吉備における平城宮型式瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会　1977年

註５　湊哲夫ほか『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会　1980年

註６　図中の尺は，塔を基準とし，他の建物などの想定を可能にした遺構（特に溝）との距離を参考までに示したものである。また，１尺を30cmで取り扱った。

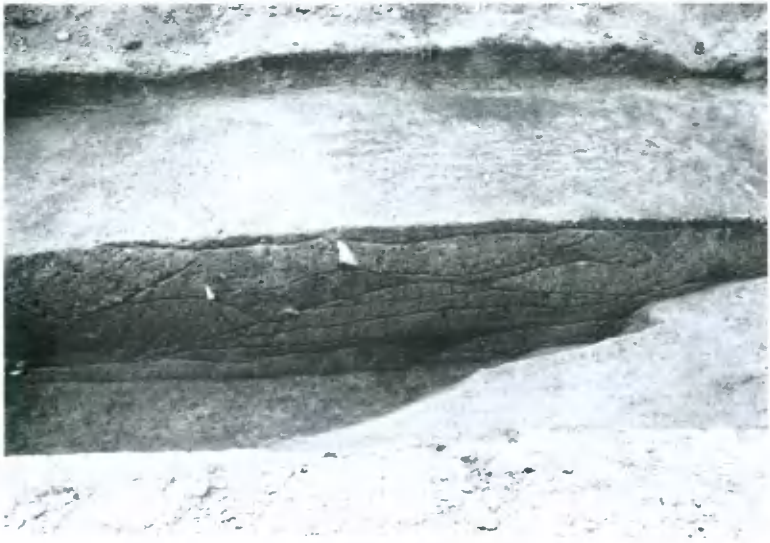
註７　時期は不明であるが，遺構・遺物の項で記述していないが，数点の鉄滓と銅滓が一点出土していることを付け加えておく。

1－1　吉岡廃寺遠景（北西から）　破線は想定寺域

1－2　吉岡廃寺遠景（南から）　丸印は礎石位置

図版 2

2－1　塔心礎（南から）



2－2　塔心礎抜取り穴断面（東から）

3 － 1　塔東側(Ｔ－24)瓦溜り　（南から）

3 － 2　塔東側(Ｔ－24)基壇版築　（北から）

図版 4

4 － 1　塔北側(Ｔ－22)瓦溜り　(東から)

4 － 2　塔北西隅(Ｔ－27)基壇　(北から)

5－1　Ｔ－14･18･19溝状遺構　（西から）

5－2　Ｔ－19溝状遺構瓦出土状態　（南から）

図版 6

6－1　T－40瓦溜り検出作業　（西から）

6－2　T－40瓦溜り　（北から）

7－1　T－40瓦溜り　（西上から）

7－2　T－40　瓦溜り下部検出遺構　（西上から）

図版 8

8－1　築地溝(T－1)検出状態　(北から)

8－2　大溝(T－28)検出状態　(南西から)

9－1　掘立柱柱穴(T－16)検出状態　(北西から)

9－2　掘立柱柱穴(T－12)検出状態　(西から)

図版10

1a類

1b類

2類

2類

軒丸瓦（1，2類）

3 類

4 類

5 a 類

5 b 類

軒丸瓦（3，4，5 a，5 b 類）

図版12

6類

7類

7類

1類

軒丸瓦(6，7類)・軒平瓦(1類)

2類

2類

軒平瓦（2類）

図版14

1

6

11

7

15

13

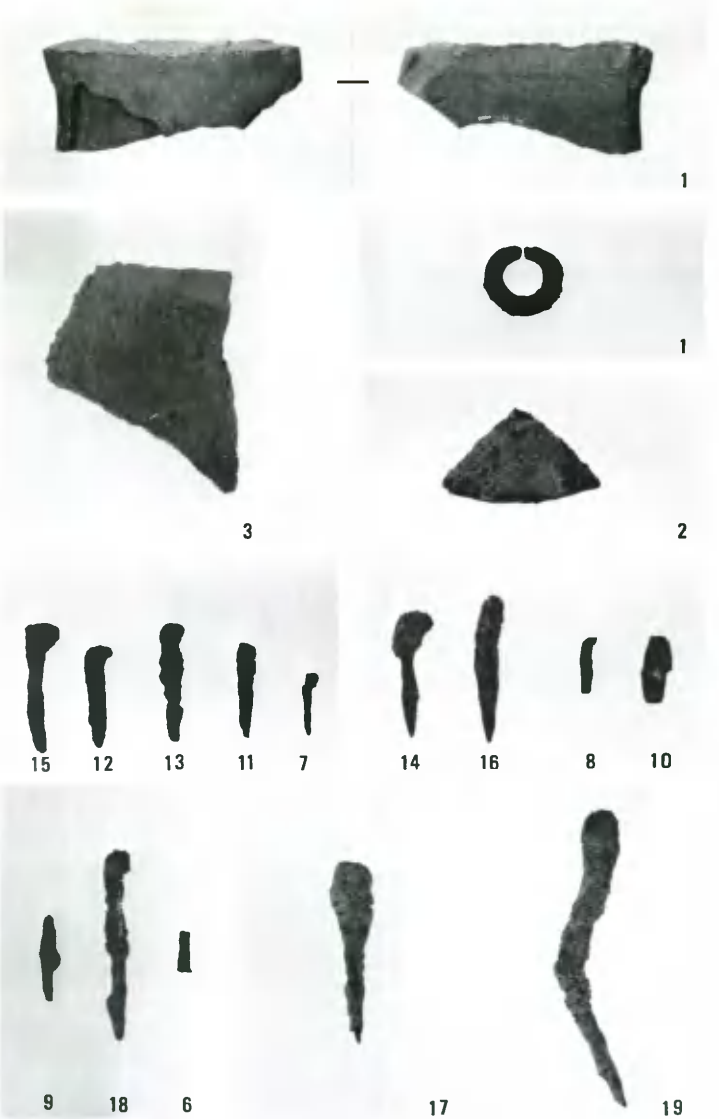
20

1

23

21

須恵器各種



台座・鴟尾・鉄製品

図版16

1

2

4

10

5

11

2

青・白磁

土器各種

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　49

吉　岡　廃　寺

1982年３月20日印刷
1982年３月30日発行

編集
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６